

学生生活実態調査報告書
(概要版)
2022 年版

北海道大学学務部

【目次】

A 回答者の基本特徴	2	G-II 研究活動と海外留学	20
回答者の男女比		外国語の能力	
学年		海外での調査研究経験	
B 家庭状況	3	海外留学の経験	
出身地		海外留学の意向／希望する留学期間	
家計支持者		研究・学業を進める上で大学に要望すること	
家計支持者の職業		H 北大の学生生活	23
家計の年間収入		学生生活の満足度	
C 住居・通学・食事の状況	5	一日の平均自習時間	
住居形態		自習を行う場所	
入寮希望とその理由		入学後の学習・研究意欲	
通学方法と通学時間		授業への出席率	
食事		大学で過ごす一日の平均時間	
学食の利用頻度		仲の良い友達の有無	
D 経済状況	9	教員との関係	
月間収入額の分布		大学院入学の目的	
収入の内訳		北大大学院を志望した理由	
月間支出額の分布		大学院入学前の出身大学等	
支出の内訳		I 健康状態	28
経済状態の実態		身体の調子／通院状況	
新型コロナウイルス感染症による影響		悩み・不安	
E アルバイトの状況	13	カウンセリングサービスの認知状況	
アルバイトの頻度		J ハラスメント等の被害状況	31
アルバイトの職種		自身のハラスメント等の被害経験／	
アルバイト週平均就労時間		他人のハラスメント等の被害を見聞きした経験	
アルバイトをする理由／しない理由		学生相談窓口の認知状況	
F 授業料減免と奨学金の利用状況	16	K 進路の希望	33
授業料減免の状況		卒業後／修了後の進路希望	
奨学金の利用状況／奨学金の種類		博士後期課程に進学しない理由	
日本学術振興会特別研究員の給与		希望職種	
緊急授業料減免の利用状況		就職で重要視すること	
G-I 課外活動とボランティア活動	18	就職希望地域	
課外活動団体への加入の有無／課外活動の週平均活動日数		インターンシップ参加経験	
ボランティア活動経験の有無／ボランティア活動内容			

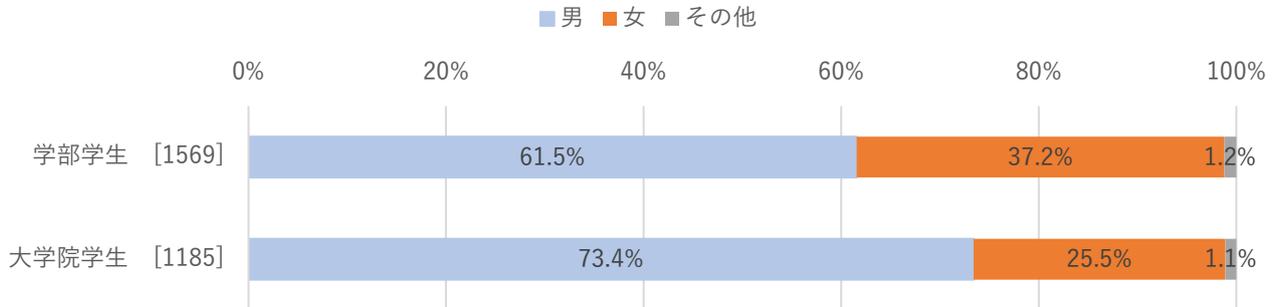
学生生活実態調査とは、本学学生の生活実態や本学に対する期待・要望などを把握し、学生の生活・修学・進路などの支援体制の充実に資するため基礎資料を得るとともに、入学前の学生への広報活動に活用することを目的として、4年に1回実施されているものです。この報告書は、令和03年11月に実施された調査結果をとりまとめたものです。

本調査において、性別の選択肢として男女の他に「その他」という選択肢を加えましたが、性自認の多様性等の観点から、「その他」は適切ではない選択肢でありました。本件に関しまして、心証を害された方がいらっしゃいましたら大変申し訳ございません。なお、次回以降の調査実施時には、より適切な選択肢を検討させていただきますので、ご理解いただけますようお願いいたします。

A 回答者の基本的特徴

■ 回答者の男女比

- 学部学生の回答者は、「男性」(61.5%)、「女性」(37.2%)、「その他」(1.2%)である。
- 大学院学生の回答者は、「男性」(73.4%)、「女性」(25.5%)、「その他」(1.1%)である。

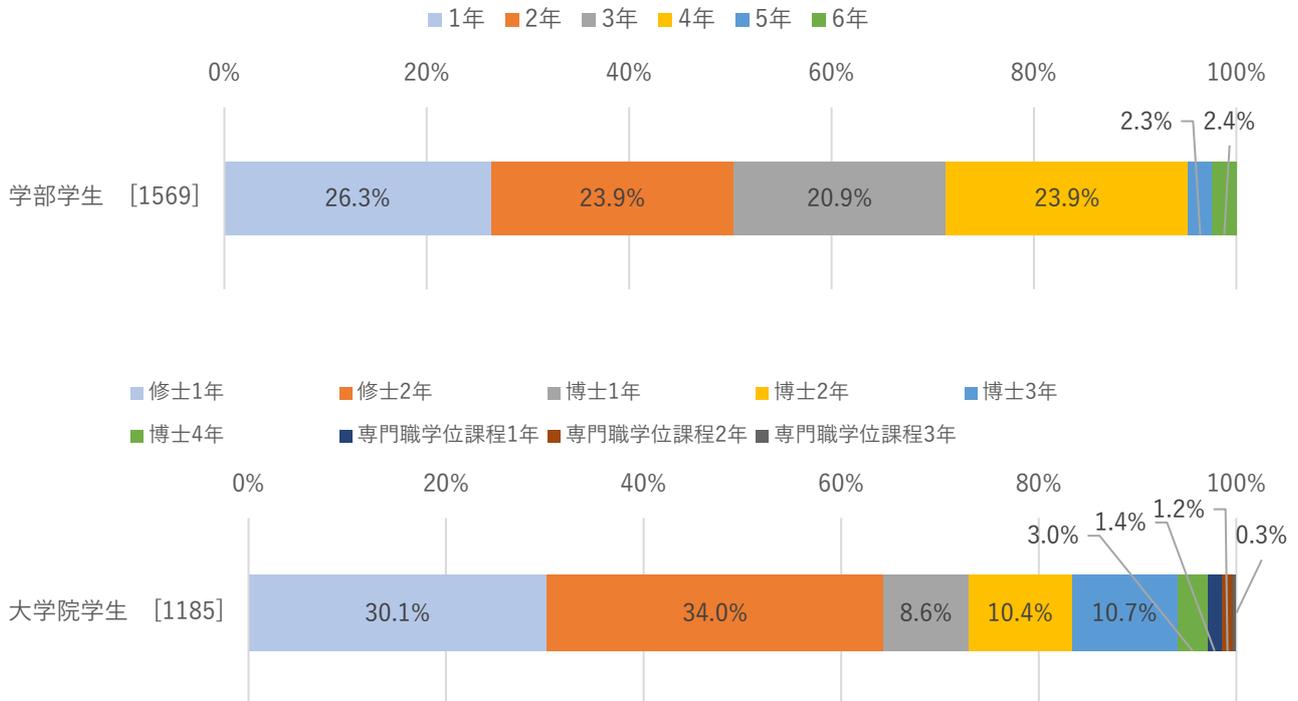


注1) [] は回答者数を示す。

注2) 「その他」は、今回調査からの新選択肢である。

■ 学年

- 学部学生の年次は、「1年」(26.3%)、「2年」(23.9%)、「3年」(20.9%)、「4年」(23.9%)である。医学部・歯学部・薬学部・獣医学部のみからなる「5年」と「6年」は、合算して4.7%である。
- 大学院学生の年次は、「修士1年」(30.1%)、「修士2年」(34.0%)、「博士1年」(8.6%)、「博士2年」(10.4%)、「博士3年」(10.7%)、「博士4年」(3.0%)、「専門職1年」(1.4%)、「専門職2年」(1.2%)、「専門職3年」(0.3%)である。修士課程、博士課程、専門職学位課程をそれぞれ合算すると、修士課程が64.1%、博士課程が32.7%、専門職学位課程が5.9%である。

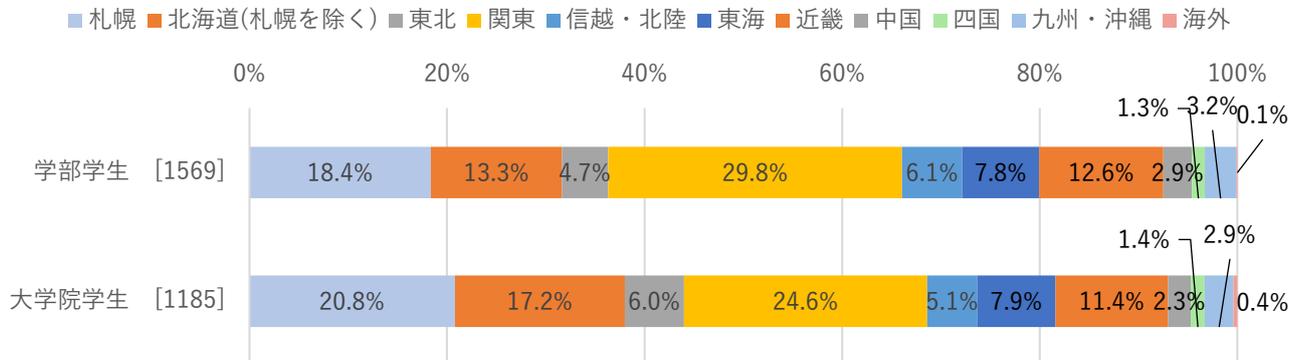


注1) [] は回答者数を示す。

B 家庭状況

■ 出身地

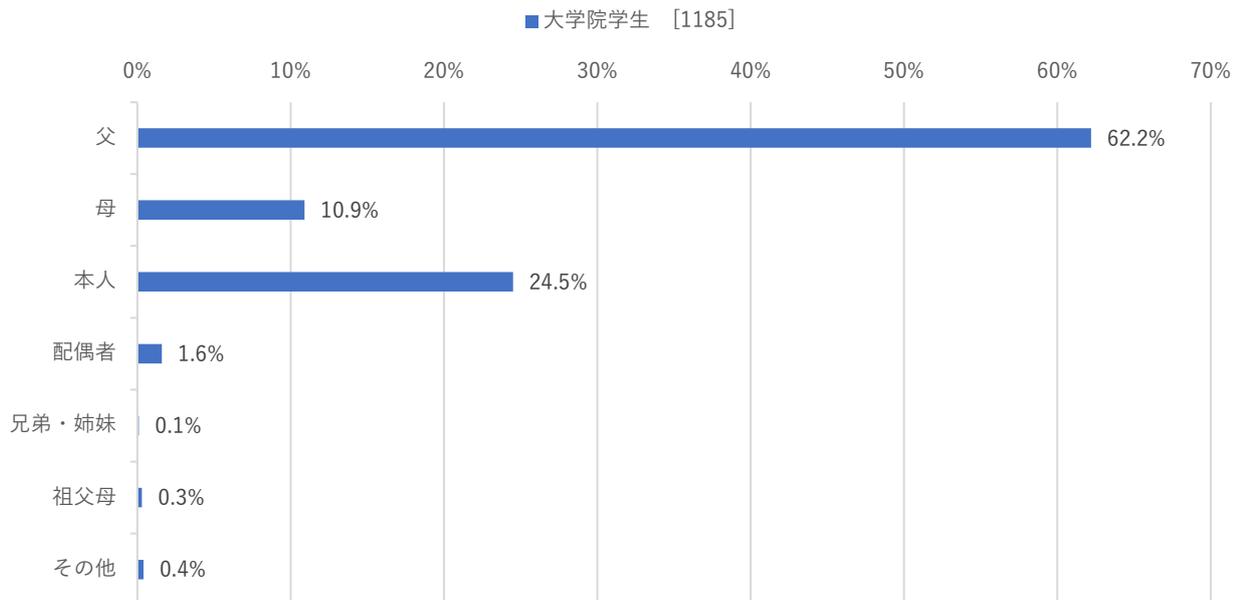
- 学部学生の「札幌」出身者は18.4%、札幌を含む道内出身者は31.7%である。道内出身者に次いで多いのは、「関東」(29.8%)である。
- 大学院学生は、「札幌」出身者が20.8%、札幌を含む道内出身者は38.0%である。道内出身者に次いで多いのは、学部学生と同じく「関東」(24.6%)である。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 家計支持者(大学院生のみ)

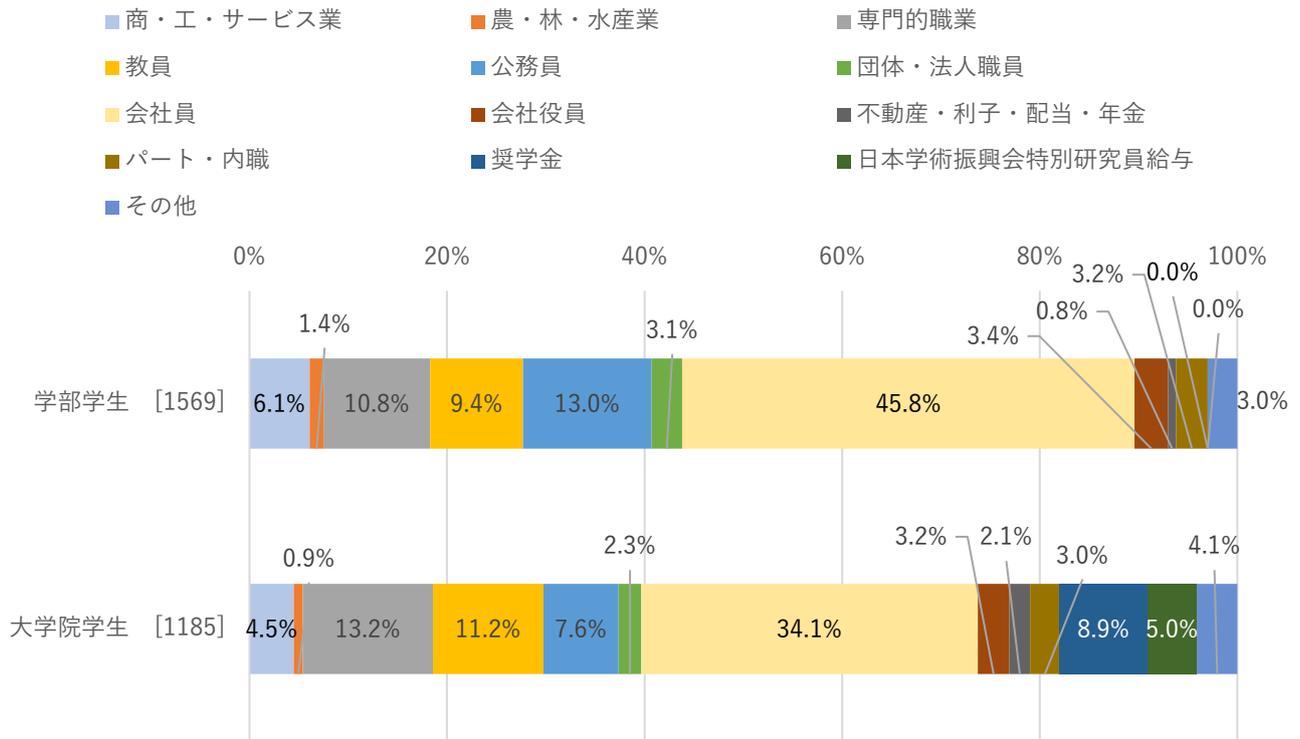
- 家計支持者は、「父」が62.2%と最も多い。次いで、「本人」が24.5%、「母」が10.9%である。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 家計支持者の職業

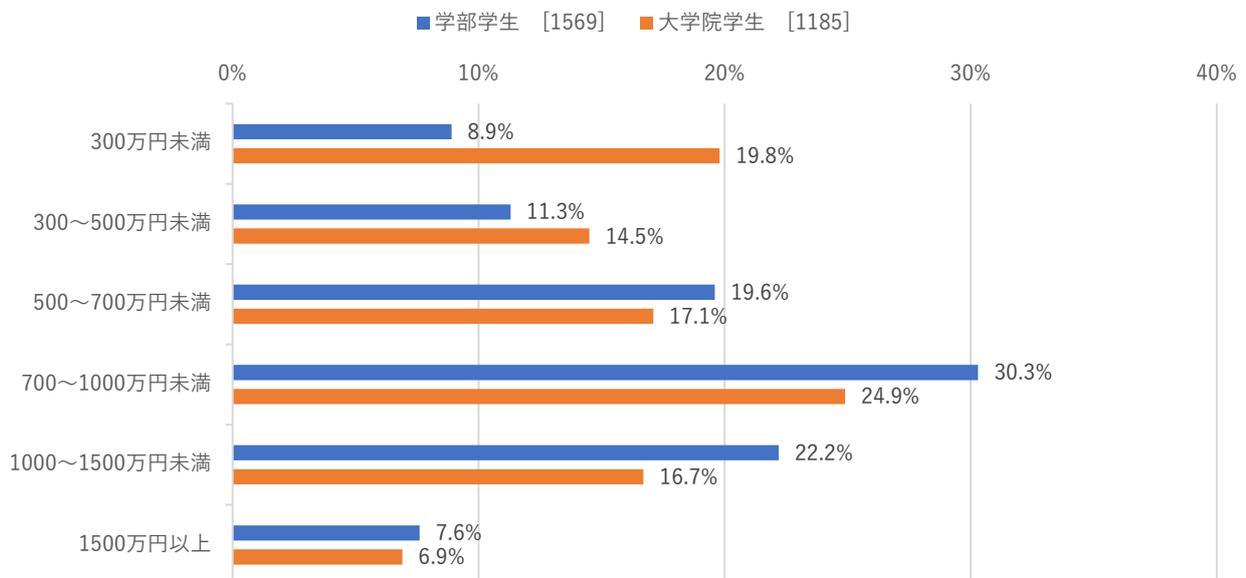
● 学部学生・大学院学生ともに、家計支持者の職業は、「会社員」が最も多く、次いで「専門的職業」、「公務員」、「教員」である。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 家庭の年間収入

● 家庭の年間総収入は、学部学生・大学院学生ともに、「700～1000万円未満」が最も多い。学部学生は、次に「1000～1500万円未満」「500～700万円未満」と続く。大学院学生は、「300万円未満」「500～700万円未満」が続く。

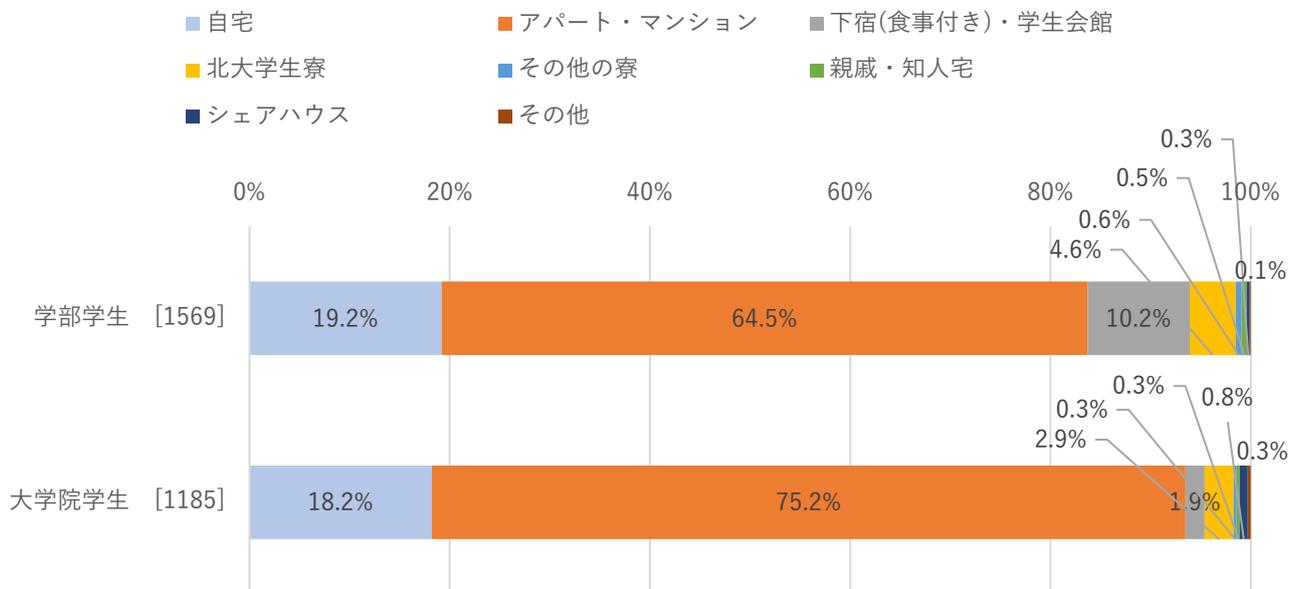


注1) [] は回答者数を示す。

C 住居・通学・食事の状況

■ 住居形態

- 学部学生・大学院学生ともに「アパート・マンション」が最も多く、次いで「自宅」となる。「自宅」は学部学生の方が多く、「アパート・マンション」は大学院学生の方が多い。また、学部学生は「北大学生寮」が4.6%であった。

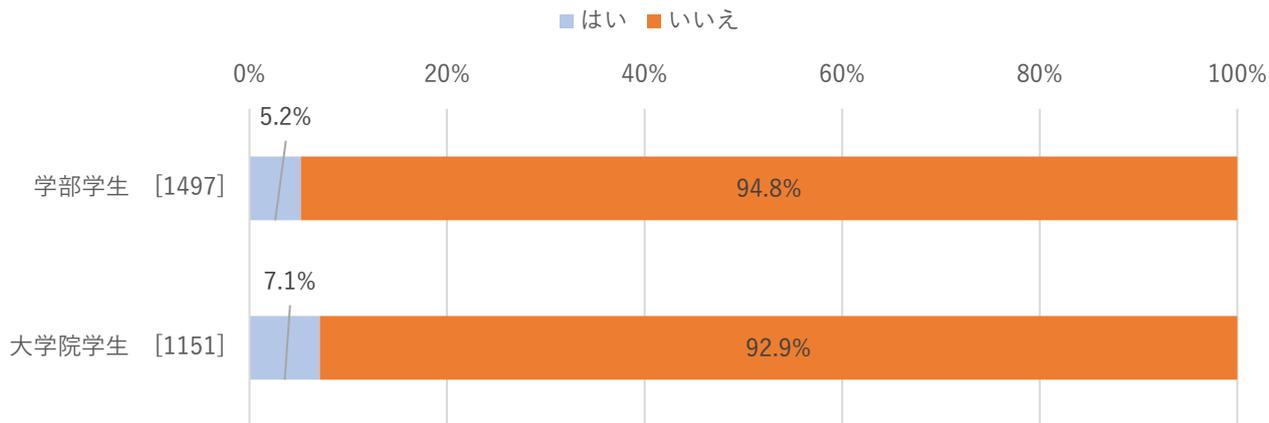


注1) [] は回答者数を示す。

■ 入寮希望とその理由

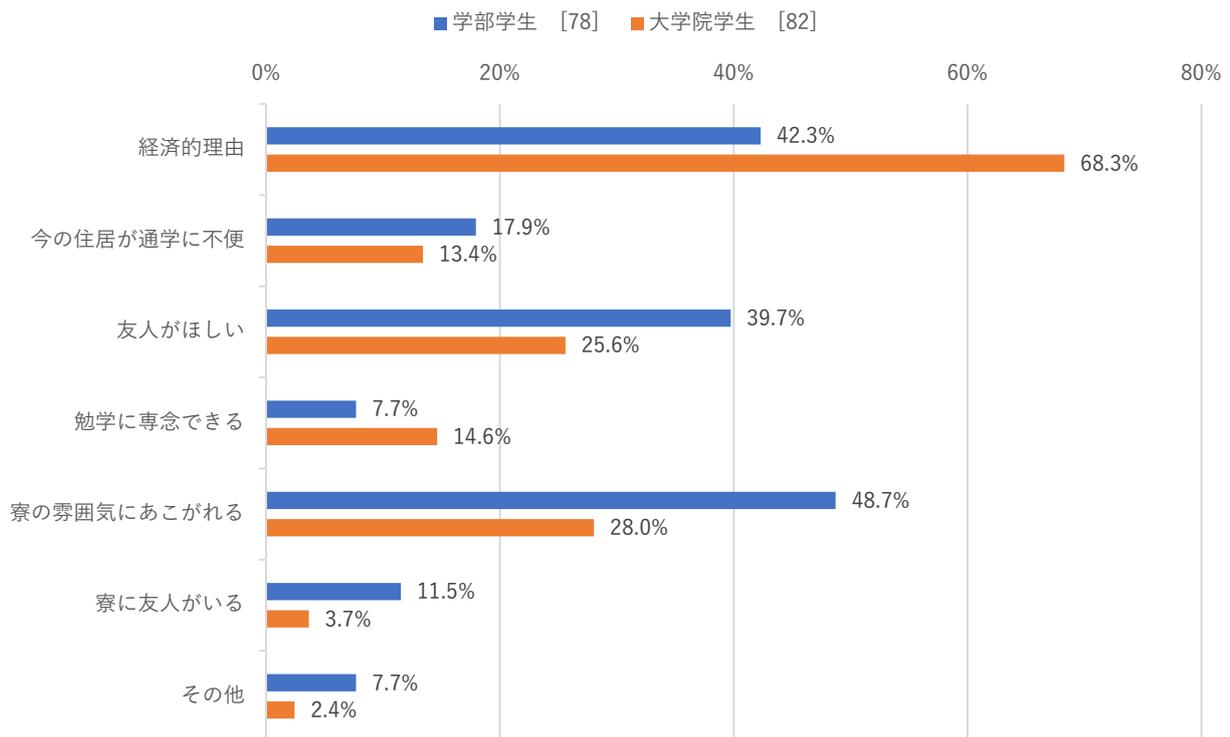
- 学部学生で入寮希望があるのは5.2%、大学院学生は7.1%である。
- 入寮を希望する理由は、学部学生は「寮の雰囲気にあこがれる」、大学院学生は「経済的な理由」が最も多い。
- 入寮を希望しない理由は、学部学生・大学院学生ともに「集団生活がわずらわしい」が最も多い。

【入寮希望】



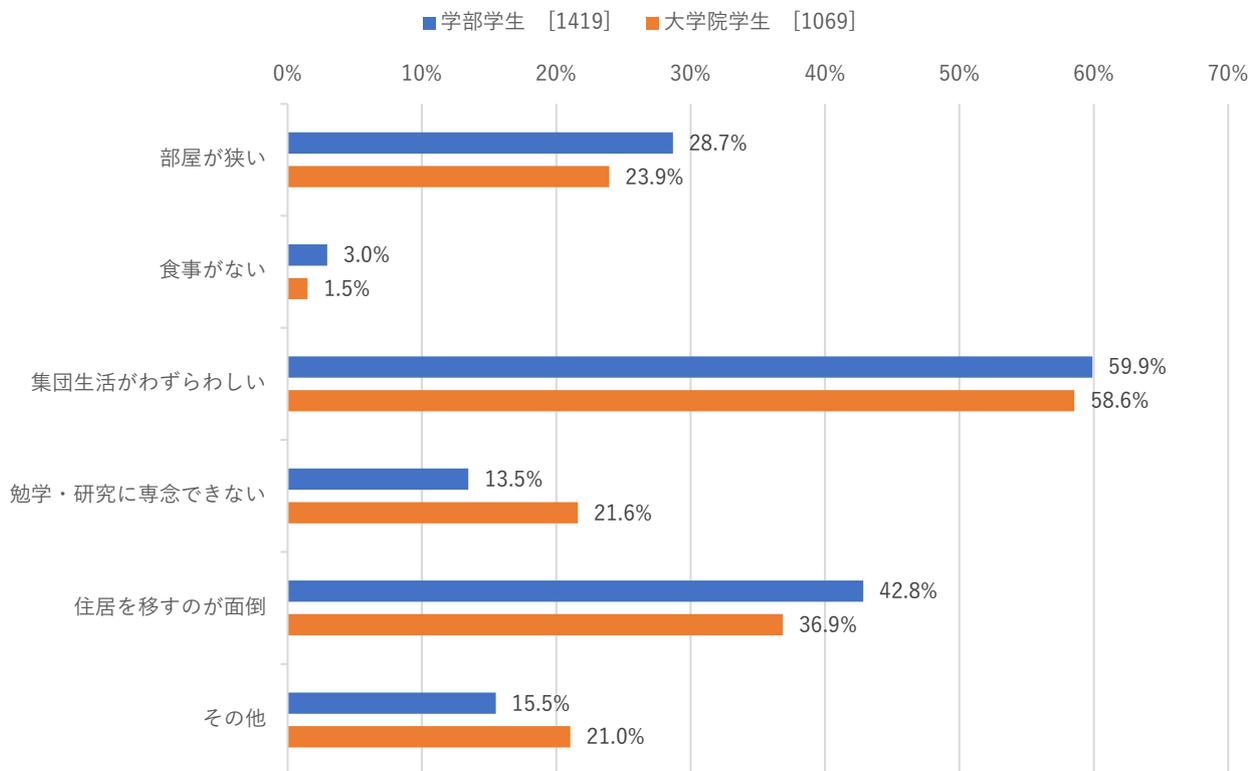
注1) [] は回答者数を示す。

【入寮を希望の理由】 ※入寮希望者ベース



注1) [] は回答者数を示す。

【入寮を希望しない理由】 ※入寮非希望者ベース

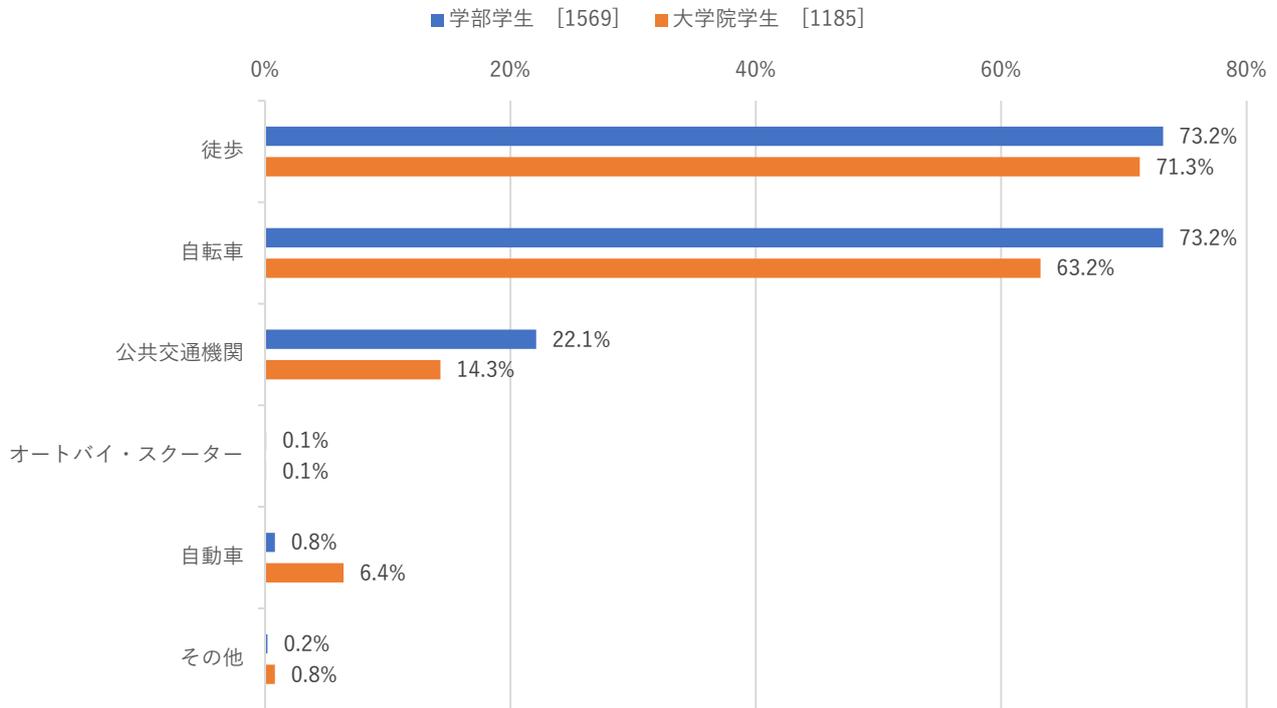


注1) [] は回答者数を示す。

■ 通学方法と通学時間

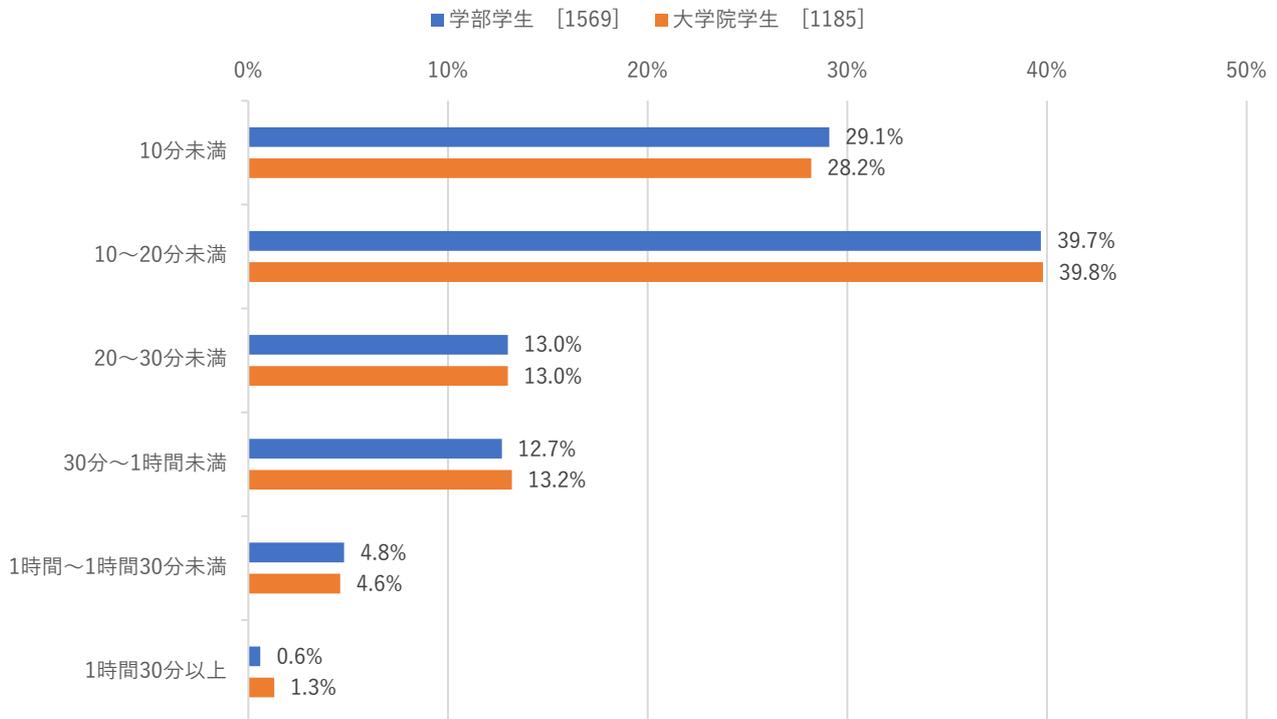
- 通学方法は、学部学生・大学院学生ともに「自転車」と「徒歩」通学が圧倒的に多い。次いで「公共交通機関」である。通学時間は、学部学生・大学院学生ともに「10～20分未満」が40%弱で最も多い。次いで多いのは「10分未満」で、30%弱である。

【通学方法】



注1) [] は回答者数を示す。

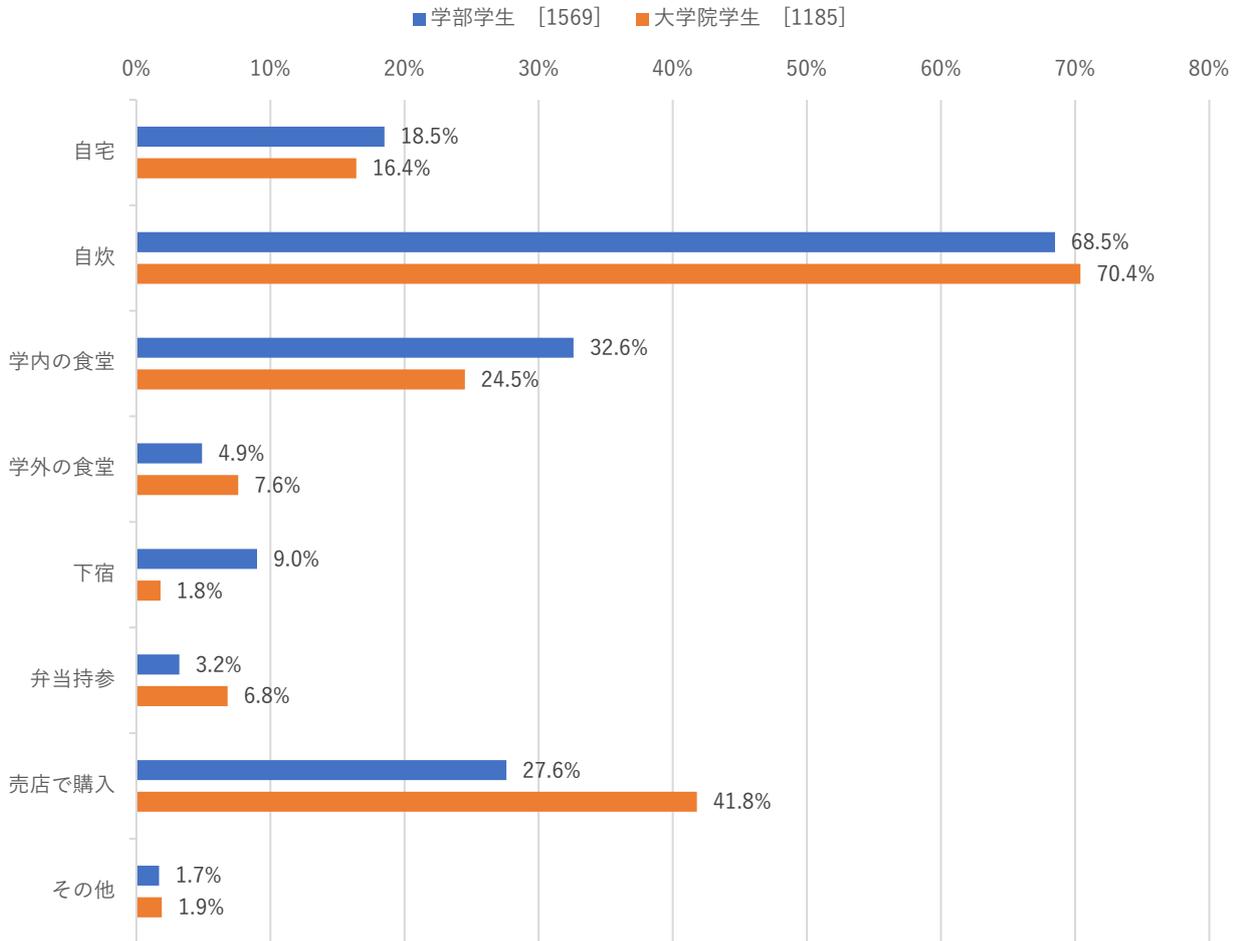
【通学時間】



注1) [] は回答者数を示す。

■ 食事

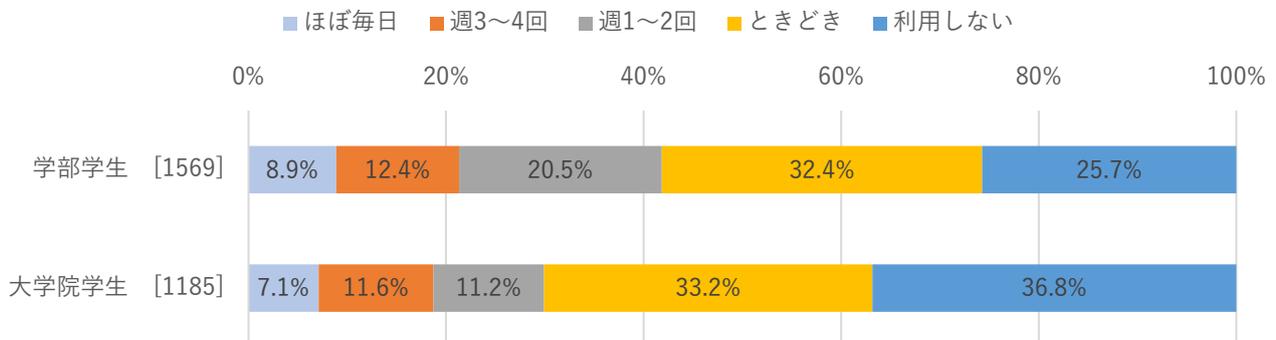
- 学部学生・大学院学生ともに、「自炊」している学生は約64%。次に多いのは、学部学生は「学内の食堂」(32.5%)、大学院学生は「売店で購入」(41.7%)である。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 学食の利用頻度

- 学食の利用頻度は、学部学生・大学院学生ともに「ほぼ毎日」は1割に満たない。週1回以上利用する人は、「ほぼ毎日」「週3~4回」「週1~2回」を合算して、学部学生で4割程度、大学院学生で3割程度である。一方「利用しない」学生も、3割前後みられる。

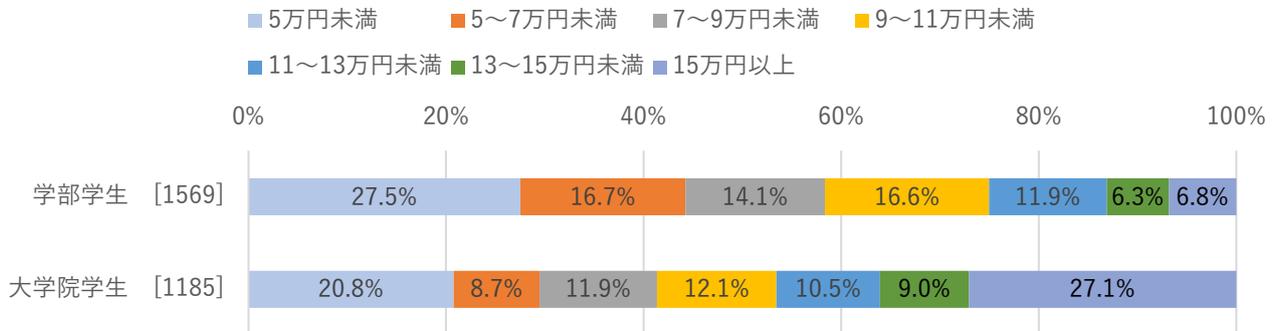


注1) [] は回答者数を示す。

D 経済状況

■ 月間収入額の分布

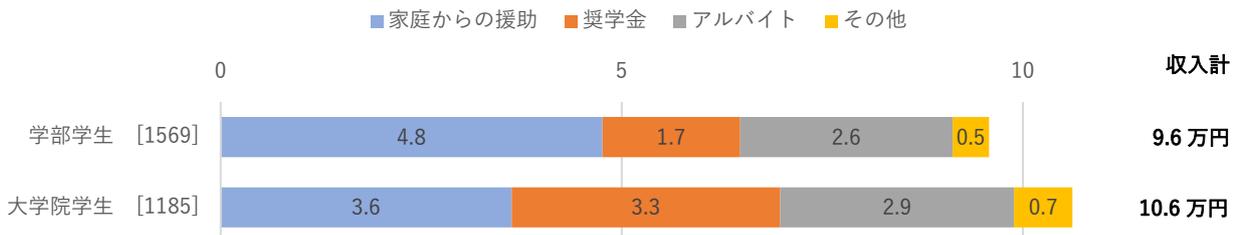
- 学部学生・大学院学生を比較すると、「5万円未満」、「5～7万円未満」では、学部学生の占める割合が高く、「15万円以上」では、大学院学生の方が、割合が高くなる。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 収入の内訳（月額）

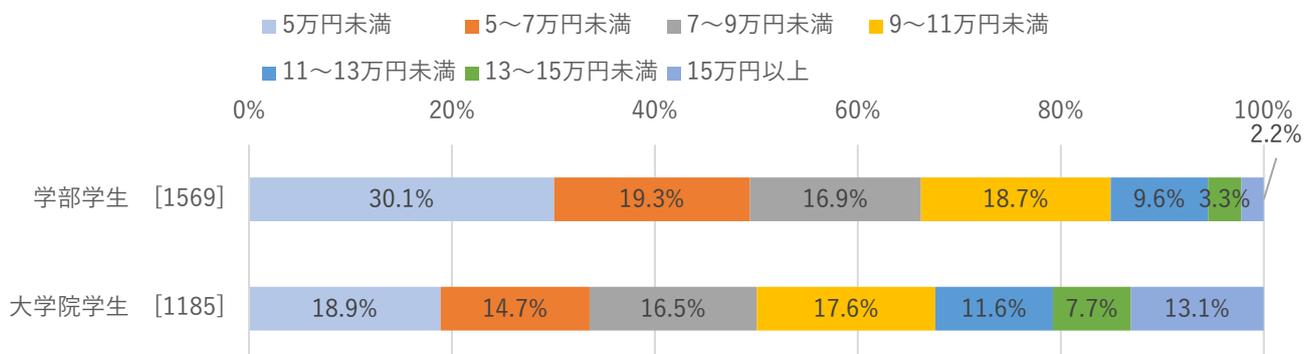
- 平均月間収入額は、学部学生が9.6万円。大学院学生が10.6万円である。
- 学部学生・大学院学生のどちらも「家庭からの援助」が最大の収入項目である。
- 大学院学生は、学部学生に比べ「奨学金」の貸与が多い。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 月間支出額の分布

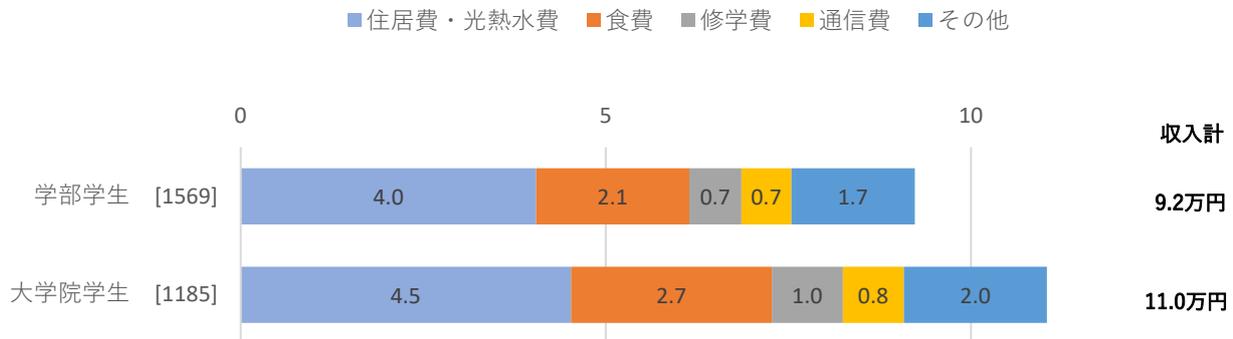
- 学部学生の月間支出額は、「5万円未満」が30.1%、「5～7万円未満」19.3%、「7～9万円未満」16.9%である。
- 大学院学生は、「5万円未満」が18.9%、「5～7万円未満」14.7%、「7～9万円未満」16.5%である。学部学生と比べると、月間支出額が「7万円未満」の学生が少なく、「9万円以上」が多い。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 支出の内訳（月額）

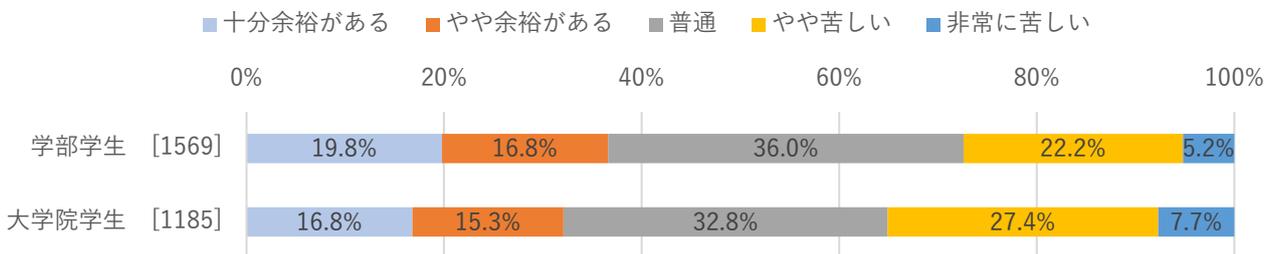
- 平均月間支出額は、学部学生が9.2万円、大学院学生が11.0万円である。学部学生・大学院学生ともに「住居費・光熱水費」が最大支出項目で、次いで「食費」となっている。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 経済状態の実態

- 現在の経済状態は、学部学生で「十分余裕がある」が19.8%、「やや余裕がある」が16.8%で、合わせると「余裕がある」の割合は36.6%である。一方、「やや苦しい」(22.2%)、「非常に苦しい」(5.2%)を合わせると27.4%であった。
- 大学院学生は、「十分余裕がある」が16.8%、「やや余裕がある」が15.3%で、合わせると「余裕がある」の割合は32.1%である。一方、「やや苦しい」(27.4%)、「非常に苦しい」(7.7%)を合わせると「苦しい」の割合は35.1%であった。
- 学部学生に比べ、大学院学生は、「苦しい」の占める割合が多い。

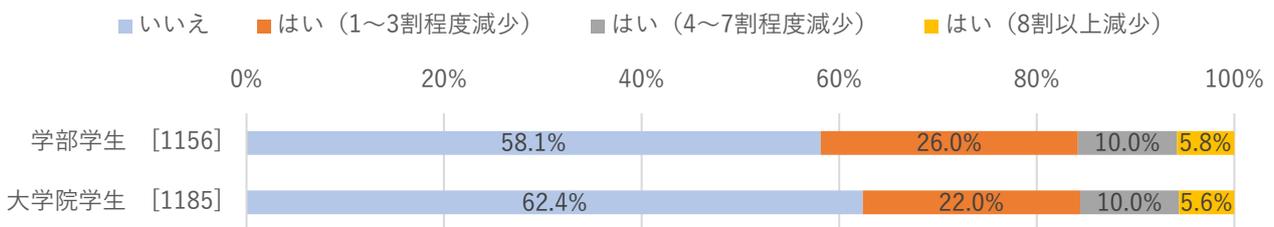


注1) [] は回答者数を示す。

■ 新型コロナウイルス感染症による収入への影響

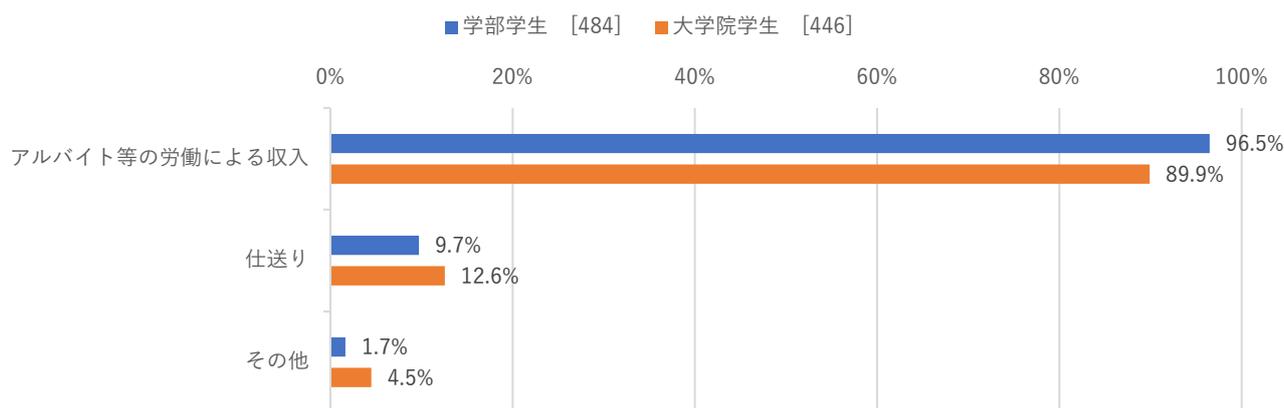
- 学部学生・大学院学生ともに、新型コロナウイルス感染症流行前と比べて、収入が「1～3割減少」が25%前後、「4～7割減少」が10%前後、「8割以上減少」が5%前後。合算すると、収入が減少した学生は40%前後。
- 減少した収入は、学部学生・大学院学生ともに、「アルバイトなどの労働による収入」が9割前後と比率が高い。

【新型コロナウイルス感染症による収入減少】



注1) [] は回答者数を示す。

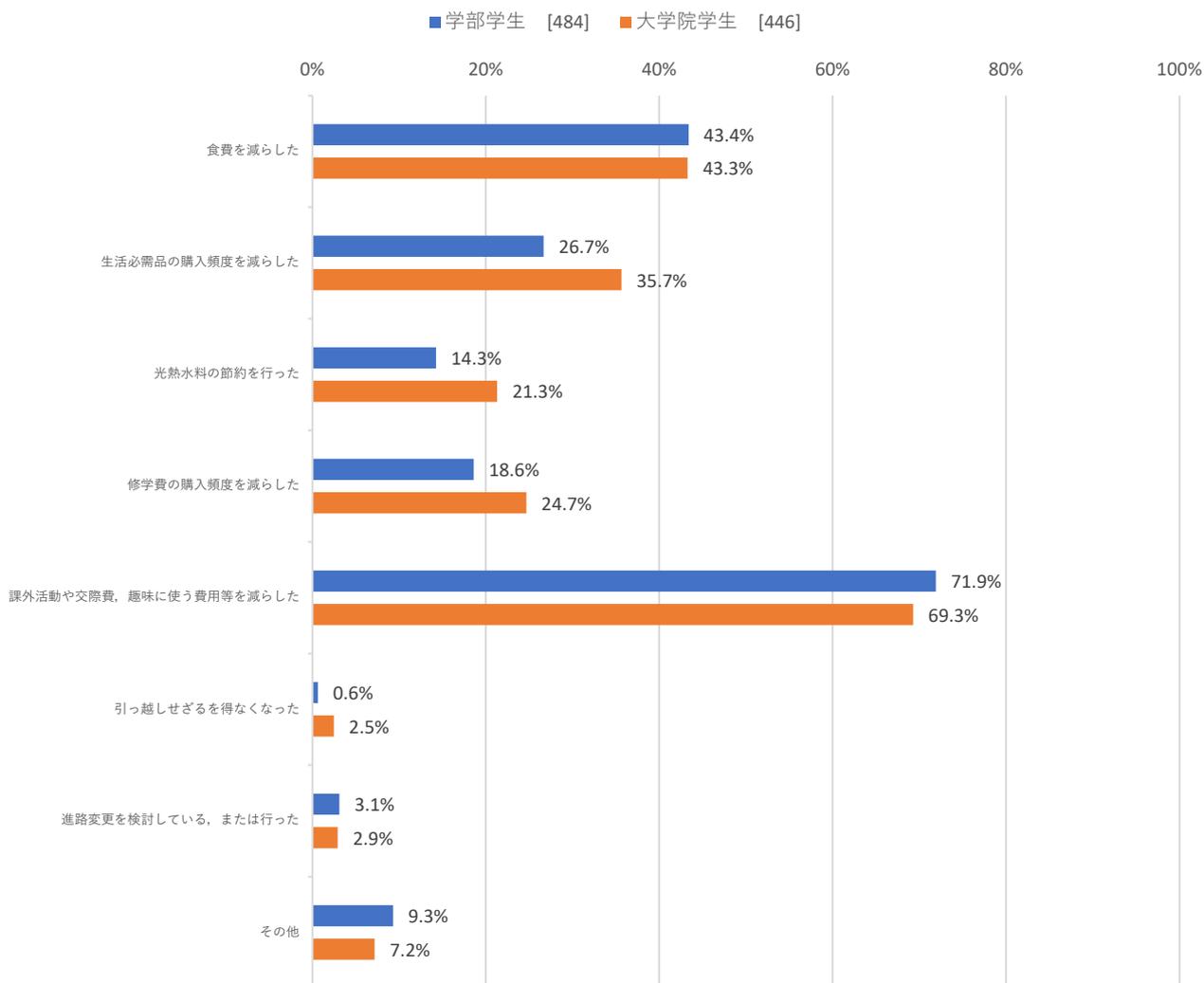
【主に減少した収入源】



注1) [] は回答者数を示す。

■ 収入減少による生活への影響

- 収入減少による生活への影響として、「課外活動や交際費、趣味に使う費用等を減らした」が7割前後と最も多い。次いで、「食費を減らした」が4割強、「生活必需品の購入頻度を減らした」が3割前後となっている。

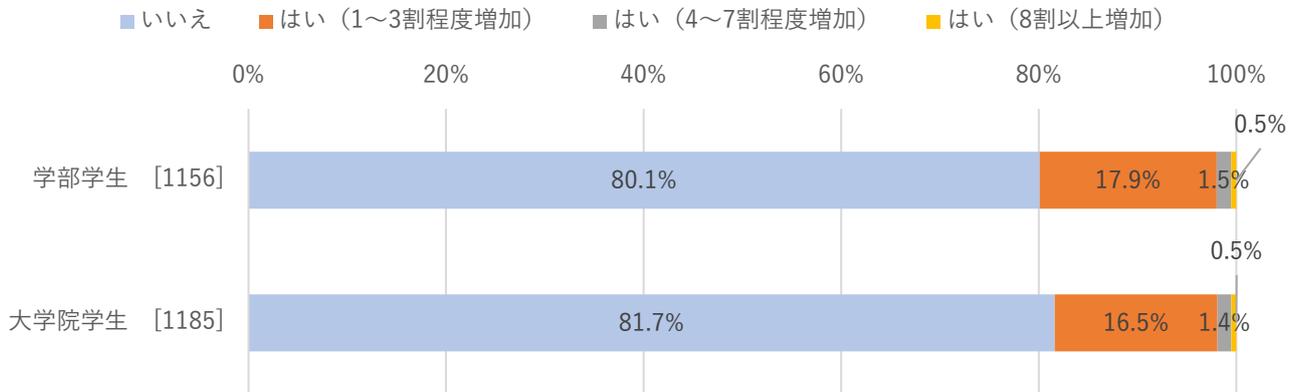


注1) [] は回答者数を示す。

■ 新型コロナウイルス感染症による支出への影響

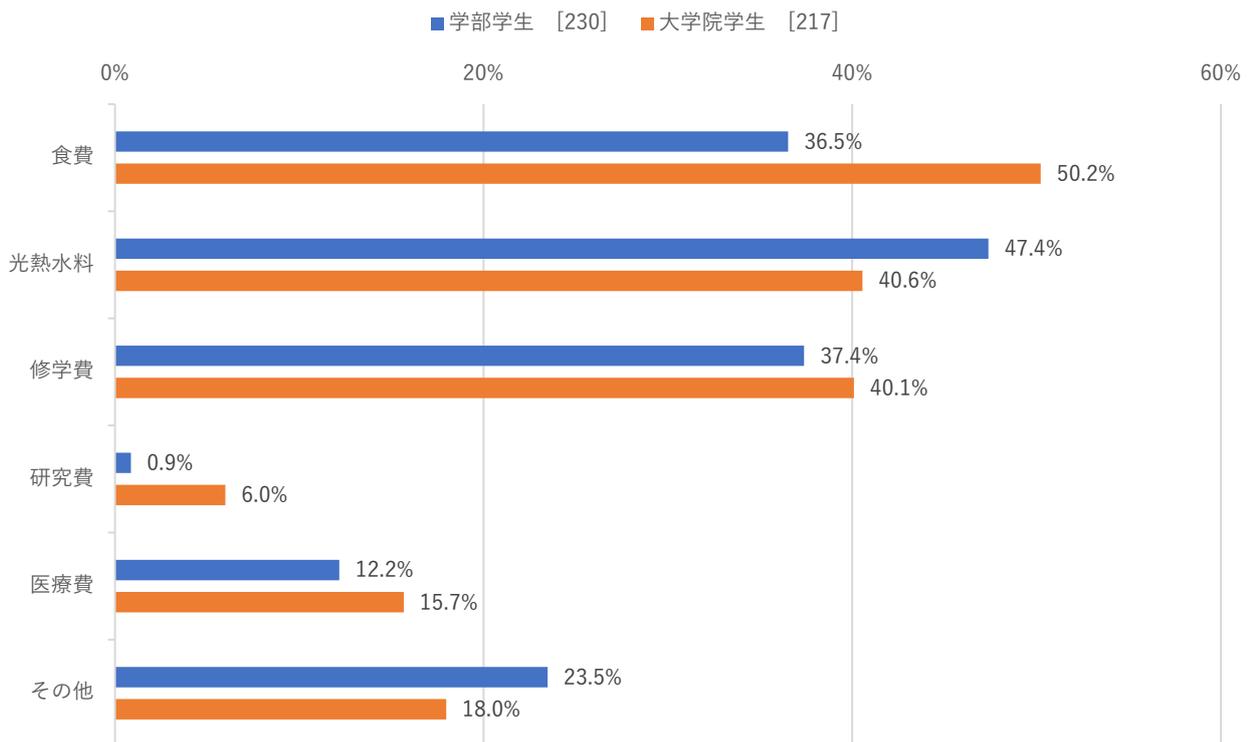
- 学部学生・大学院学生ともに、新型コロナウイルス感染症流行前と比べて、支出が「1～3割増加」が20%弱、「4～7割増加」が1%強、「8割以上増加」が0.5%。合算すると、約20%の学生で支出が増加した。
- 増加した支出は、「食費」「光熱水料」「修学費」がそれぞれ4割前後と多くなっている。

【新型コロナウイルス感染症による支出増加】



注1) [] は回答者数を示す。

【主に増加した支出源】

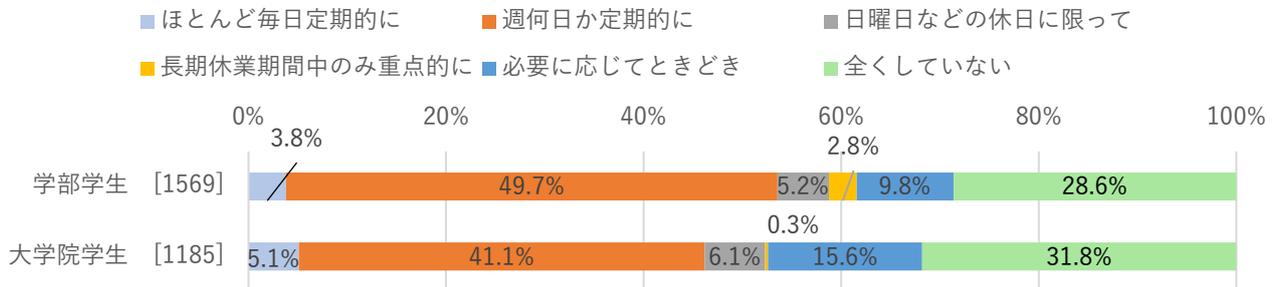


注1) [] は回答者数を示す。

E アルバイトの状況

■ アルバイトの頻度（学部別／月間収入額別）

- アルバイトを「全くしていない」学生は、学部学生が28.6%、大学院学生が31.8%である。一方、アルバイトをしている学生のうち「週何日か定期的に」が学部学生（49.7%）、大学院学生（41.1%）であり、ともに最も多い。

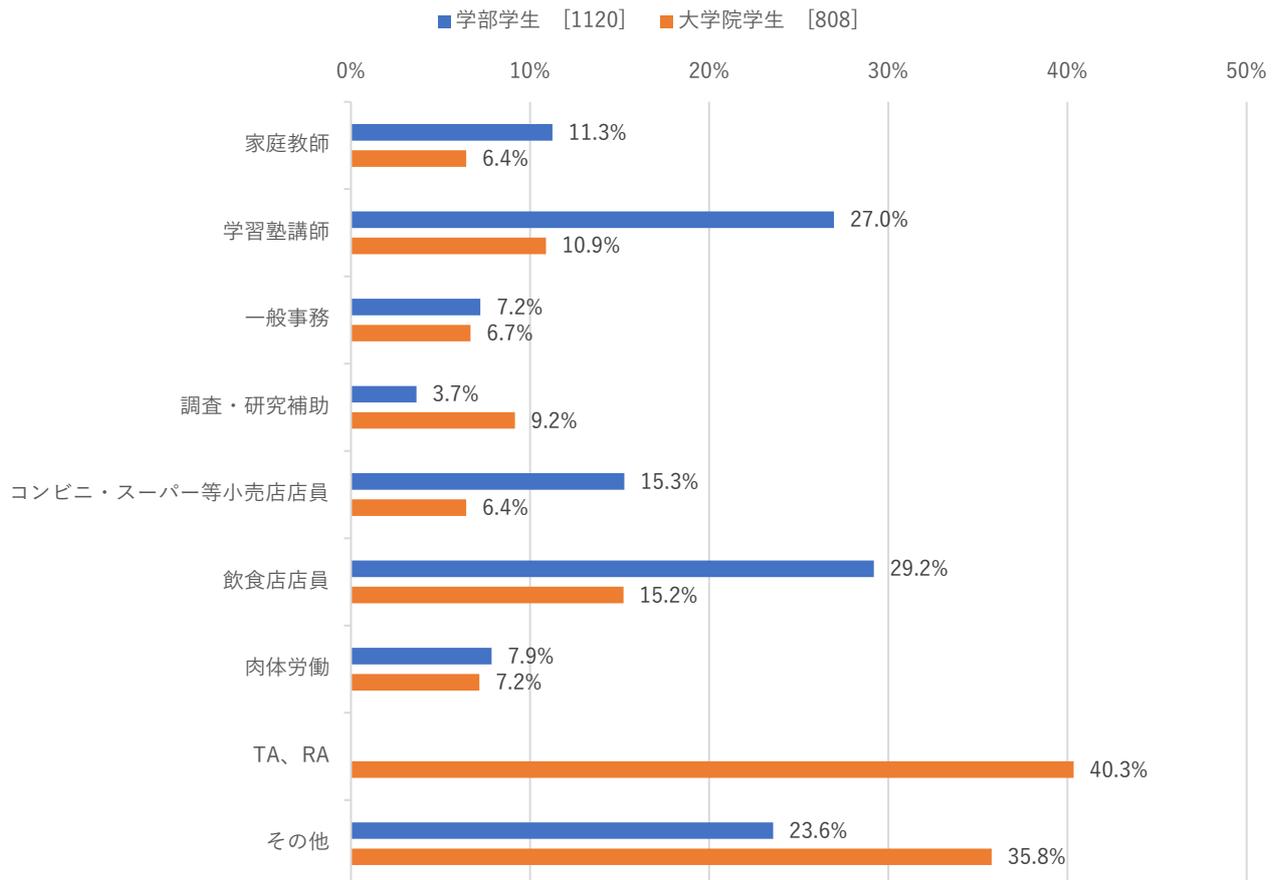


注1) [] は回答者数を示す。

■ アルバイトの職種 ※アルバイト従事者ベース

- 学部学生は「飲食店店員」（29.2%）、大学院学生は「ティーチングアシスタント、リサーチアシスタント（グラフ内表記「TA、RA」）」（40.3%）が最も多い。それに次いで多いのは、学部学生では、「学習塾講師」、「コンビニ・スーパー等小売店店員」、「家庭教師」である。大学院学生では、「飲食店店員」、「学習塾講師」が多い。

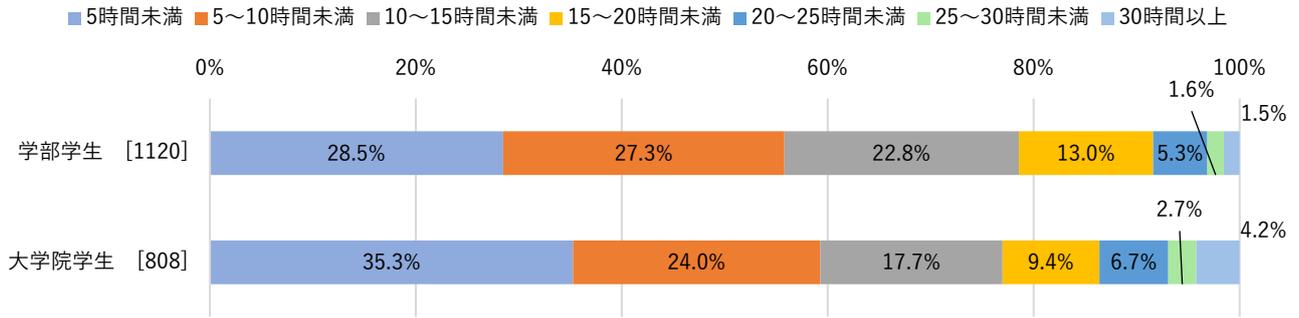
※学部学生については、「ティーチングアシスタント、リサーチアシスタント（TA、RA）」の選択肢なし



注1) [] は回答者数を示す。

■ アルバイトの週平均就労時間 ※アルバイト従事者ベース

- 学部学生・大学院学生ともに「5時間未満」が最も多く、次に「5～10時間未満」が多い。

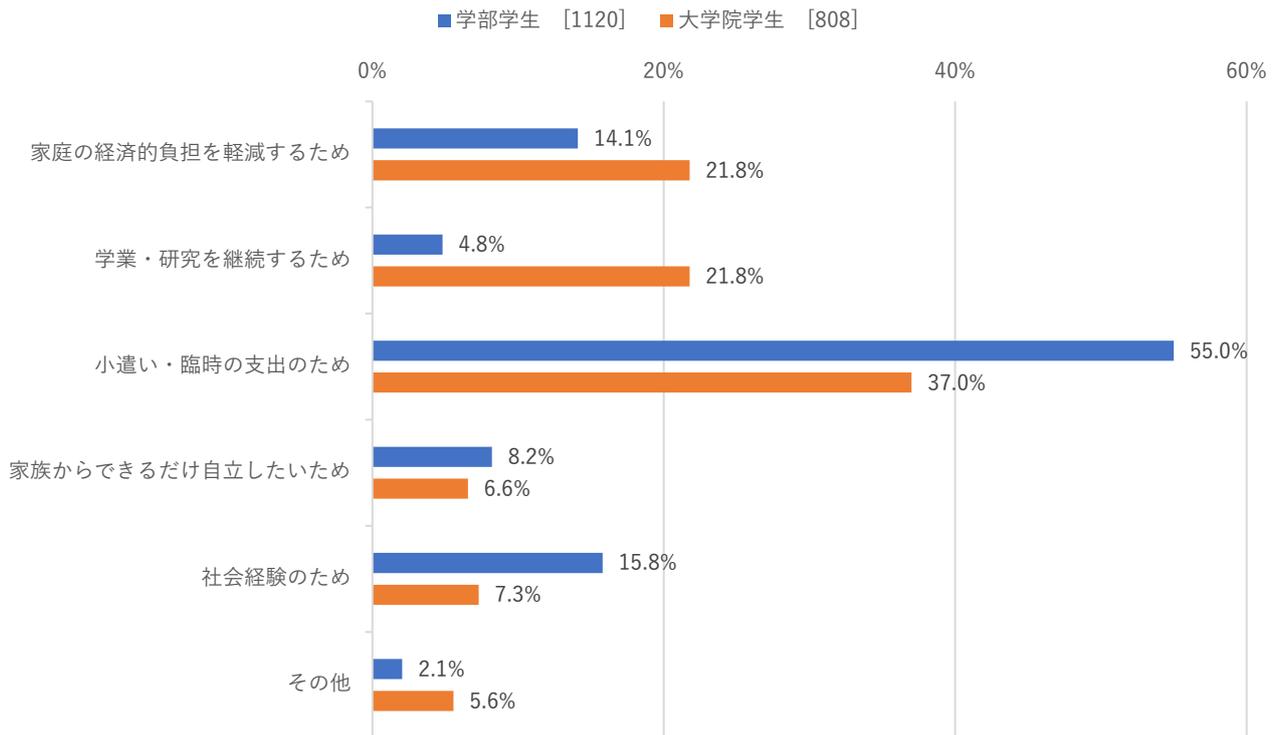


注1) [] は回答者数を示す。

■ アルバイトをする理由／アルバイトをしない理由

- アルバイトをする理由は、「小遣い・臨時の支出のため」が、学部学生（55.0%）、大学院学生（37.0%）ともに最も多い。
- それ以外に学部学生は、「社会経験」（15.8%）、「家庭の経済的負担を軽減するため」（14.1%）が続く。
- それ以外に大学院学生は、「家庭の経済的負担を軽減するため」（21.8%）、「学業・研究を継続するため」（21.8%）が続く。
- アルバイトをしない理由は、学部学生・大学院学生ともに「やりたいが、時間的余裕がない」が最も多く、次に「必要がない（経済的に余裕がある）」が続く。

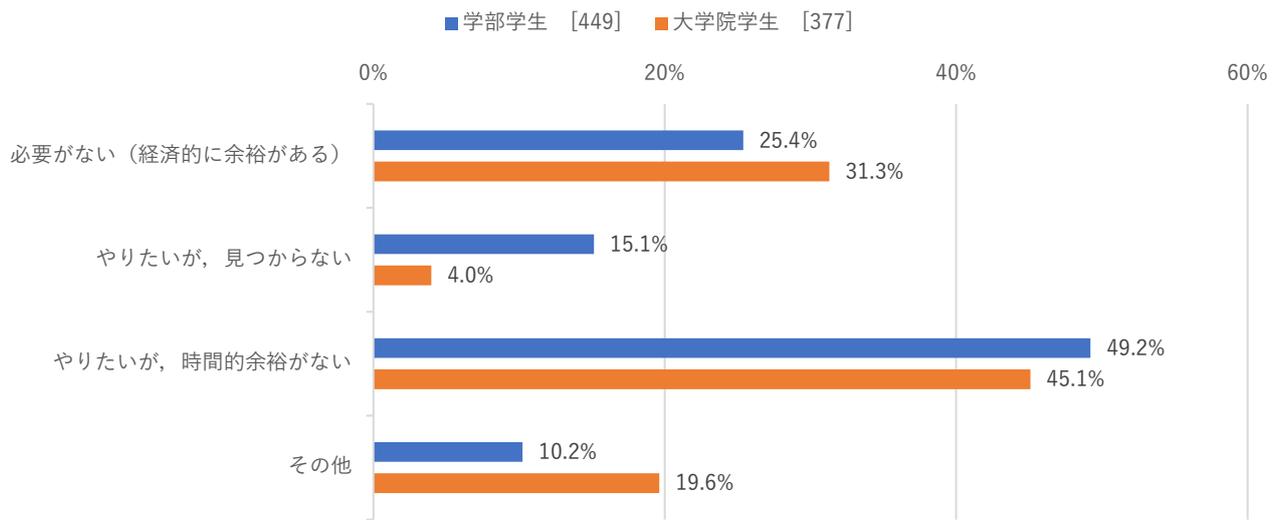
【アルバイトをする主な理由】 ※アルバイト従事者ベース



注1) [] は回答者数を示す。

【アルバイトをしない理由】

※アルバイト非従事者ベース



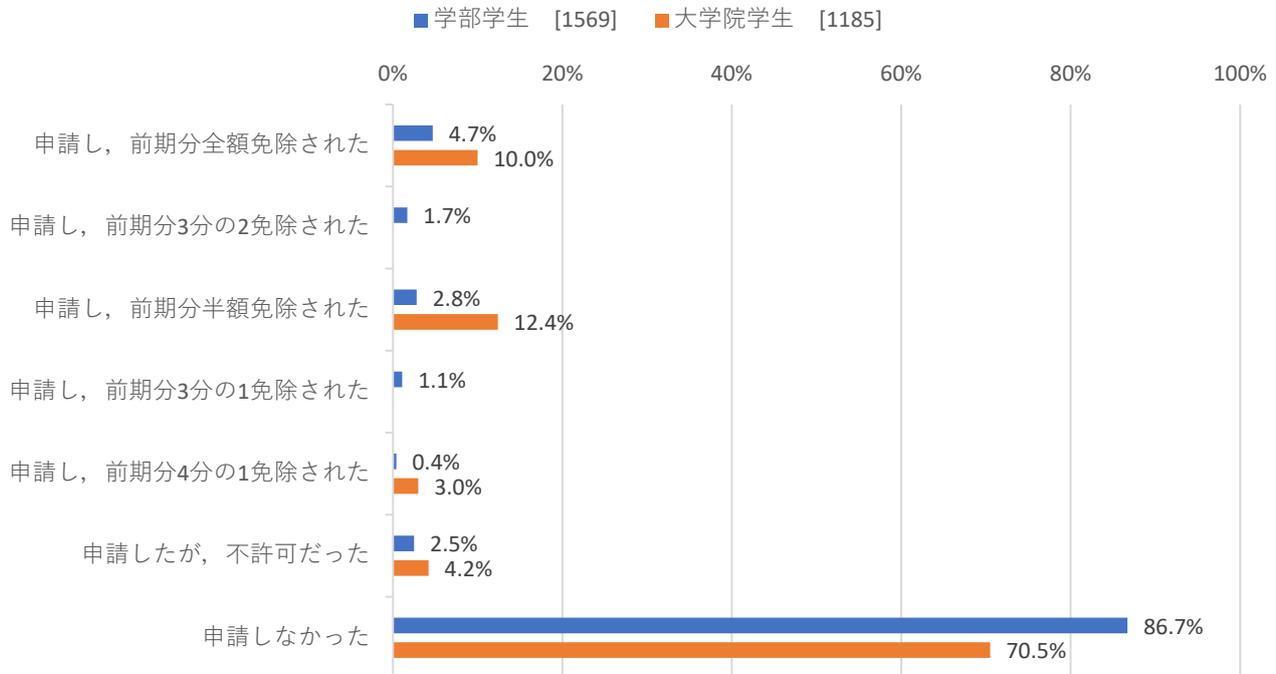
注1) [] は回答者数を示す。

F 授業料減免と奨学金の利用状況

■ 授業料減免の状況

- 学部学生では「前期分全額免除」(4.7%)、「前期分半額免除」(2.8%)である。一方、大学院学生では「前期分半額免除」(12.4%)、「前期分全額免除」(10.0%)が各1割前後を占めている。
- 授業料免除を「申請しなかった」学生は、学部学生で86.7%、大学院学生で70.5%。

※大学院生については、「申請し、前期分3分の2免除された」と「申請し、前期分3分の1免除された」の選択肢なし

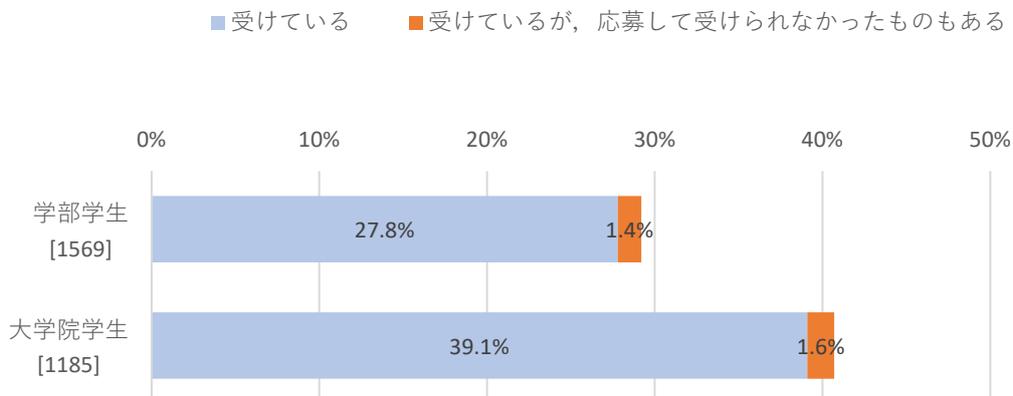


注1) [] は回答者数を示す。

■ 奨学金の利用状況／奨学金の種類

- 奨学金を利用している学生は、「受けている」と「受けているが、応募して受けられなかったものもある」を合算して、学部学生で29.2%、大学院学生で40.7%である。
- 奨学金の種類は、学部学生は「日本学生支援機構（貸与型1種）」が44.5%、「日本学生支援機構（貸与型2種）」が33.2%である。一方、大学院学生は「日本学生支援機構（貸与型1種）」が86.1%、「民間団体」が12.2%である。

【奨学金の利用状況】

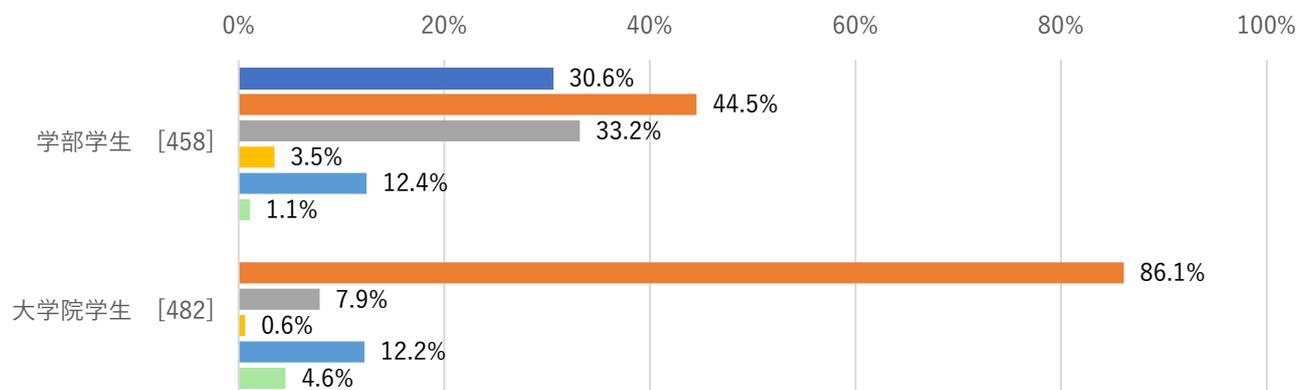


注1) [] は回答者数を示す。

【奨学金の種類】 ※奨学金受給者ベース

※大学院生については、「日本学生支援機構（給付型）」の選択肢なし

■ 日本学生支援機構（給付型） ■ 日本学生支援機構(貸与型1種) ■ 日本学生支援機構(貸与型2種)
 ■ 地方公共団体 ■ 民間団体 ■ その他

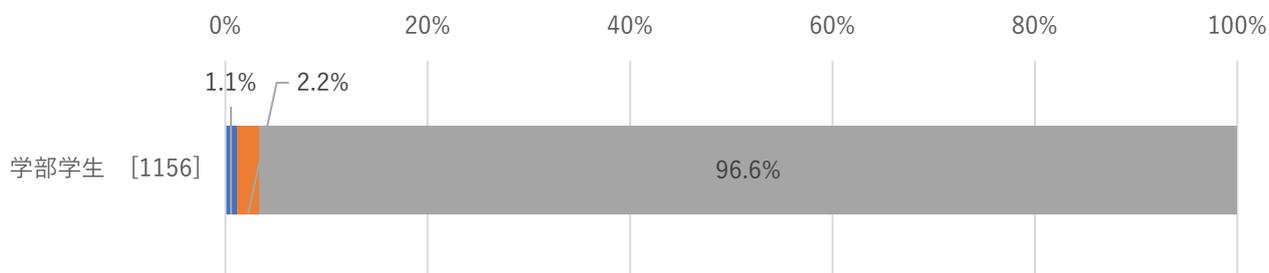


注1) [] は回答者数を示す。

■ 緊急授業料減免の利用状況（学部学生のみ）

● 緊急授業料減免を、「受けている」学生は、1.1%で、「応募しなかった」が、96.6%を占める。

■ 受けている ■ 応募したが、受けられなかった ■ 応募しなかった

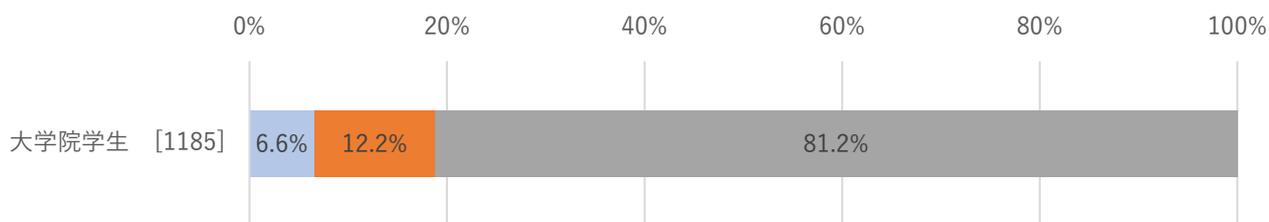


注1) [] は回答者数を示す。

■ 日本学術振興会特別研究員の給与（大学院学生のみ）

● 日本学術振興会特別研究員の給与を、「受けている」学生は6.6%で、「応募しなかった」が81.2%を占める。

■ 受けている ■ 応募したが、受けられなかった ■ 応募しなかった



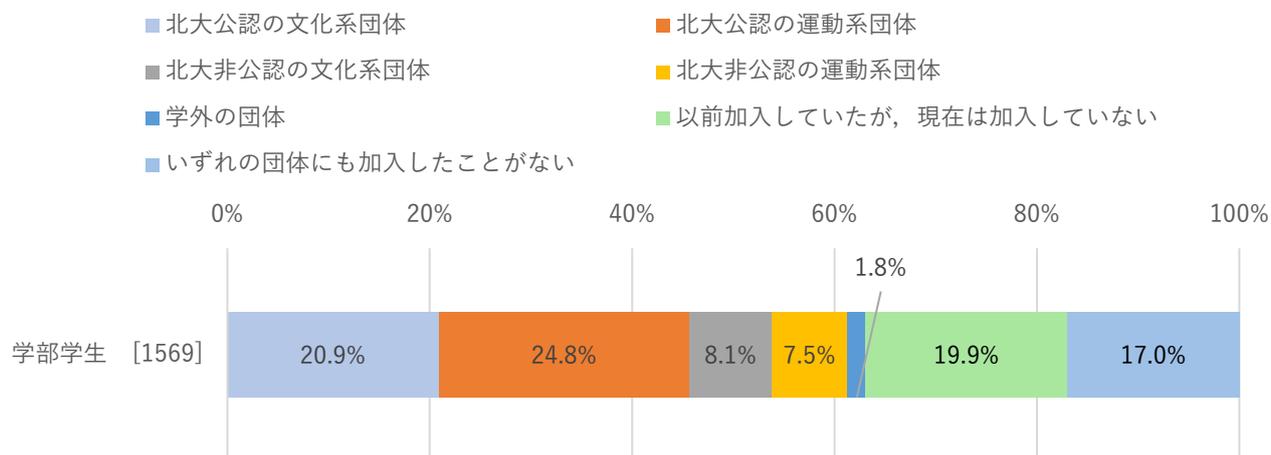
注1) [] は回答者数を示す。

G - I 課外活動とボランティア活動（学部学生のみ）

■ 課外活動団体への加入の有無／課外活動の週平均活動日数（学部学生のみ）

- 現在、何らかの団体に所属し活動している学生は63.1%で、加入の中では「北大公認の運動系団体」（24.8%）が最も多い。次いで、「北大公認の文化系団体」（20.9%）と続く。
- 課外活動の週平均活動日数は、「1～2日」（35.6%）が最も多い。「1日未満」（30.4%）と合わせると、活動日数が「2日以下」である学生が6割以上を占める。

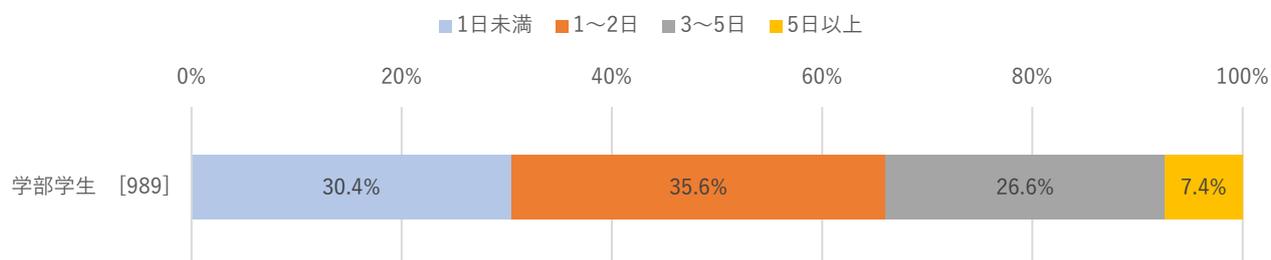
【課外活動の加入有無】



注1) [] は回答者数を示す。

【課外活動の週平均活動日数】

※課外活動団体加入者ベース



注1) [] は回答者数を示す。

■ ボランティア活動の経験の有無／ボランティア活動内容（学部学生のみ）

- ボランティア活動を「している」学生は2.2%。過去に「したことがある」学生は16.1%で、合わせると2割弱がボランティア経験者である。
- 活動内容は、「学習活動に関する指導、助言、運営協力」が24.4%、次いで「公共施設」、「自然・環境保護」、「保健・医療・衛生」がそれぞれ16.7%で多い。

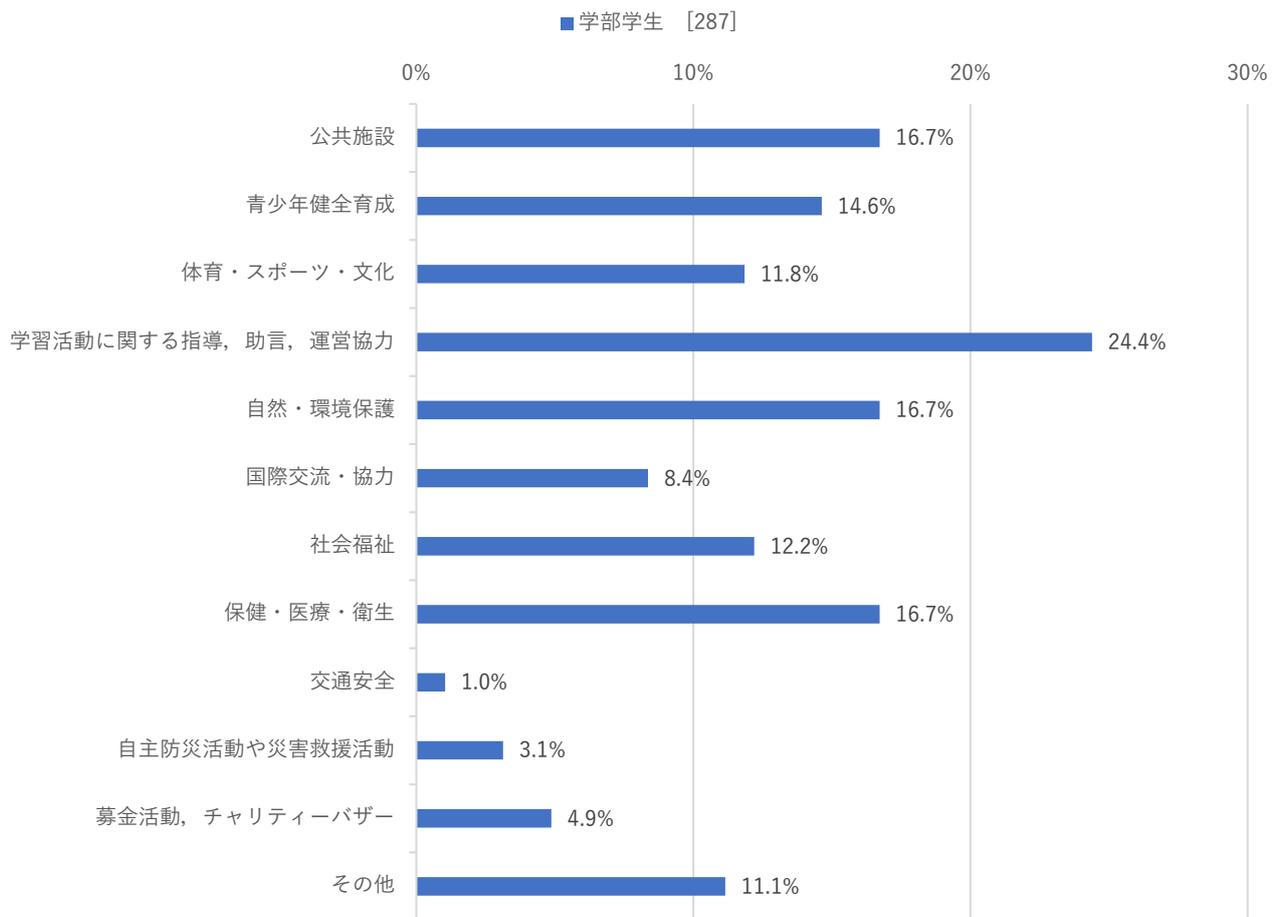
【ボランティア活動の経験の有無】



注1) [] は回答者数を示す。

【ボランティア活動内容】

※ボランティア経験者ベース



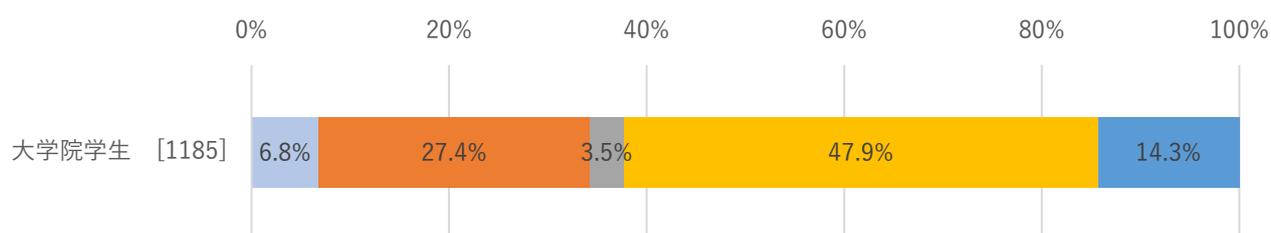
注1) [] は回答者数を示す。

G - II 研究活動と海外留学

■ 外国語の能力（大学院学生のみ）

- 外国語能力は、「読むのはなんとかできるが、作文と会話が苦手である」が47.9%と半数近くを占め、次に「読み書きには不自由しないが、会話は苦手である」が27.4%、「すべてが苦手である」が14.3%となっている。

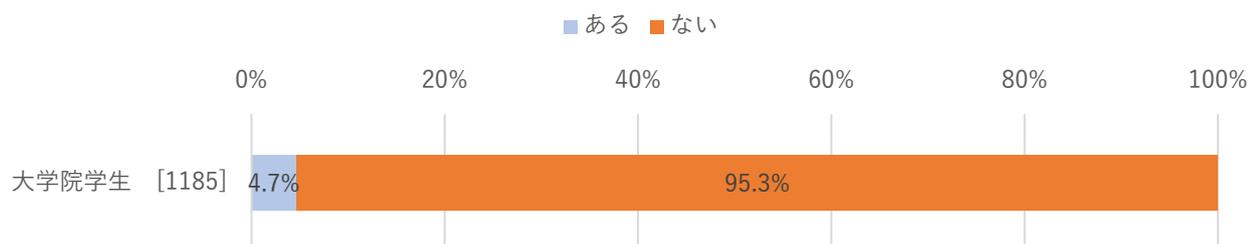
- 読み書き、会話や討論など、ほとんど不自由を感じない
- 読み書きには不自由しないが、会話は苦手である
- 読み書きは苦手であるが、会話には不自由しない
- 読むのはなんとかできるが、作文と会話は苦手である
- すべてが苦手である



注1) [] は回答者数を示す。

■ 海外での調査研究経験（大学院学生のみ）

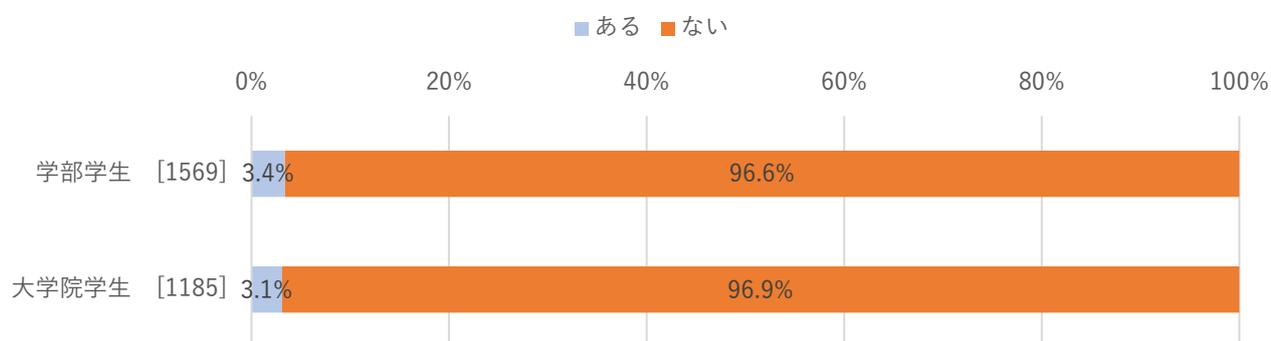
- 海外での調査研究経験が「ある」学生は4.7%である。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 海外留学の経験

- 海外留学の経験が「ある」学生は、学部学生・大学院学生ともに3%程度である。

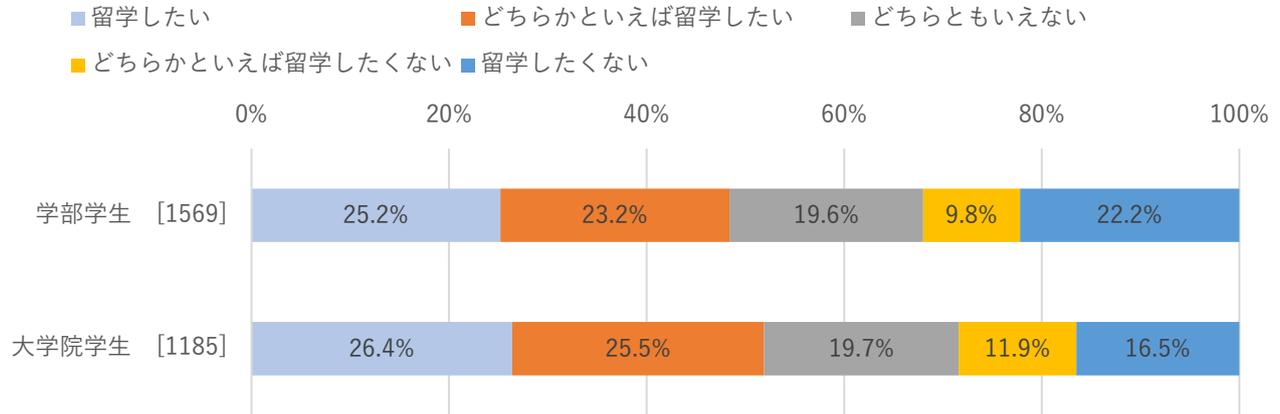


注1) [] は回答者数を示す。

■ 海外留学の意向／希望する留学期間

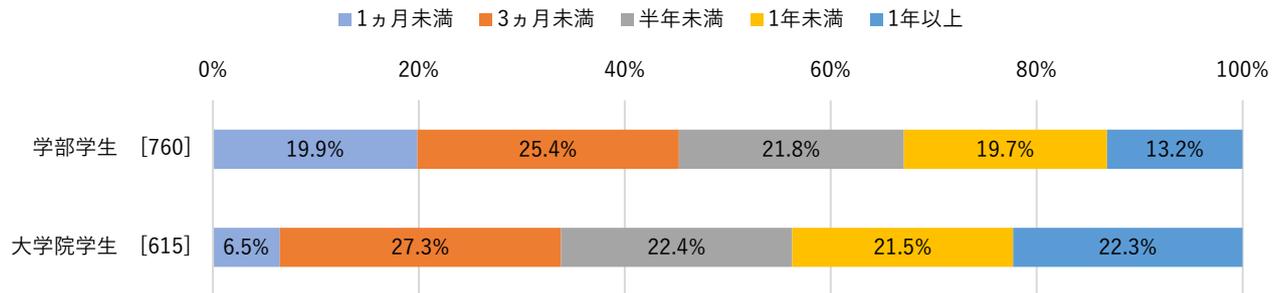
- 学部学生・大学院生ともに、「留学したい」、「どちらかといえば留学したい」学生がそれぞれ25%前後で、合算すると約半数の学生が留学を希望している。
- また、希望する留学期間は、学部学生は「1ヵ月未満」(19.9%)、「3ヵ月未満」(25.4%)、「半年未満」(21.8%)、「1年未満」(19.7%)、「1年以上」(13.2%)と様々である。 それに比べて大学院生は、「1ヵ月未満」(6.5%)が少なく「1年以上」(22.3%)が多い。

【海外留学の意向】



注1) [] は回答者数を示す。

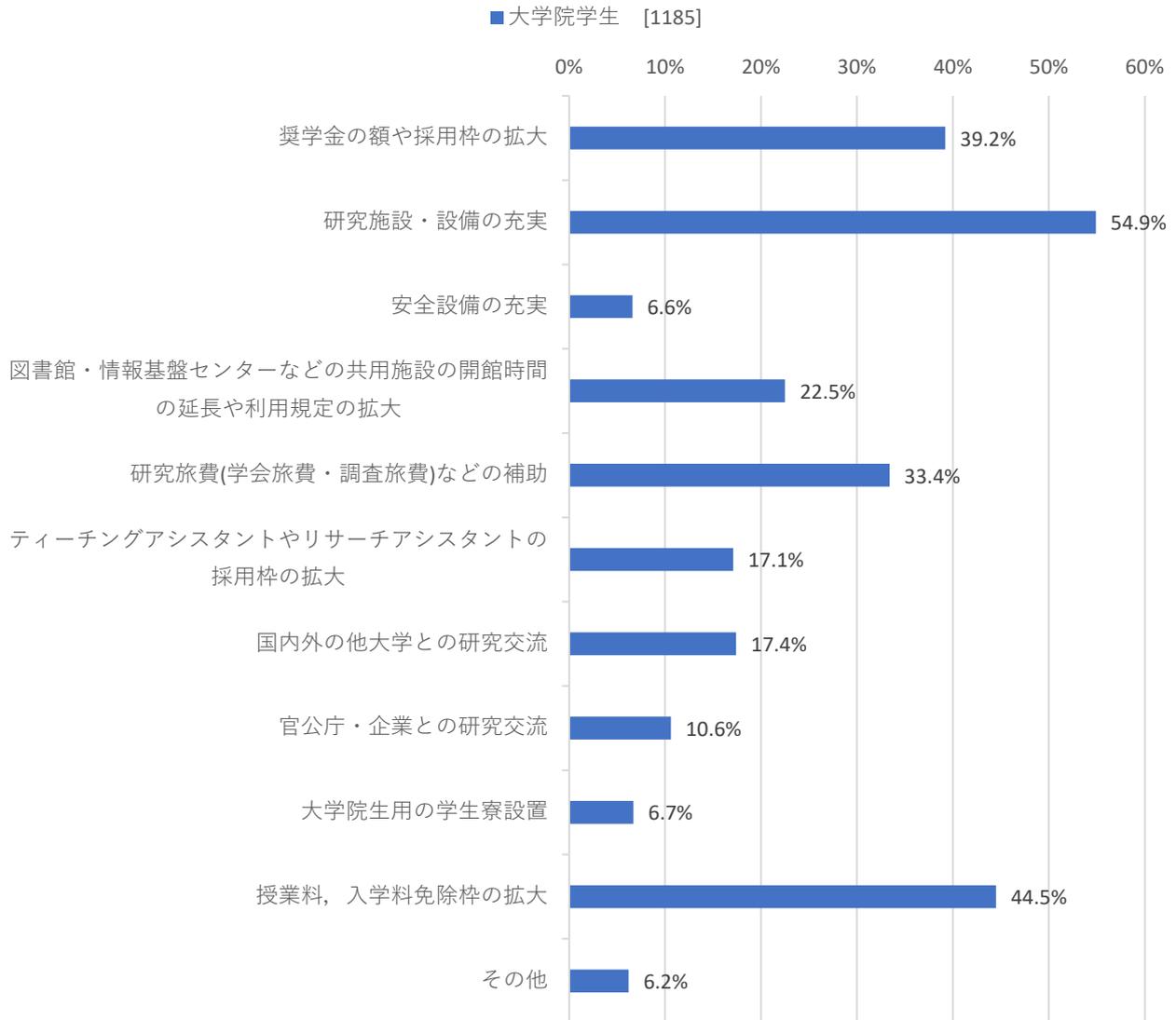
【希望する留学期間】



注1) [] は回答者数を示す。

■ 研究・学業を進める上で大学に要望すること（大学院学生のみ）

- 研究・学業を進める上で大学に要望することは、「研究施設・設備の充実」（54.9%）が最も多く、次いで「授業料、入学料免除枠の拡大」（44.5%）、「奨学金の額や採用枠の拡大」（39.2%）が4割前後で続く。



注1) [] は回答者数を示す。

H 北大の学生生活

■ 学生生活の満足度

- 平均満足度は、学部学生は3.5点、大学院学生は3.6点である（最大5点満点）。満足度が高いのは「北大・札幌の生活環境」であった。

	対面授業	オンライン授業 (オンデマンド)	オンライン授業 (ライブ)	教育研究用 施設・設備	その他の 施設・設備
学部学生 [1569]	3.5	3.5	3.2	3.5	3.4
大学院学生 [1185]	3.5	3.6	3.5	3.6	3.4

北大・札幌 の生活環境	食堂・売店 等のサービス	図書館	教員との 関係	窓口の 対応	コロナ対策	平均満足度
4.1	3.4	3.9	3.4	3.3	3.2	3.5
4.2	3.2	3.8	4.0	3.4	3.4	3.6

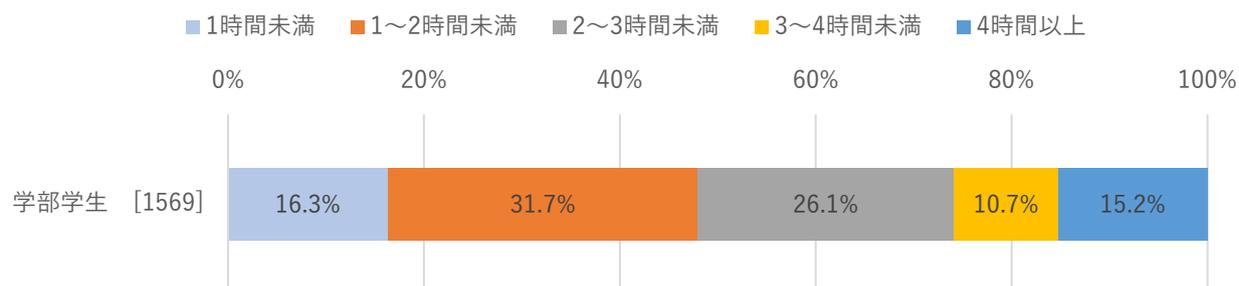
(点)

注1) [] は回答者数を示す。

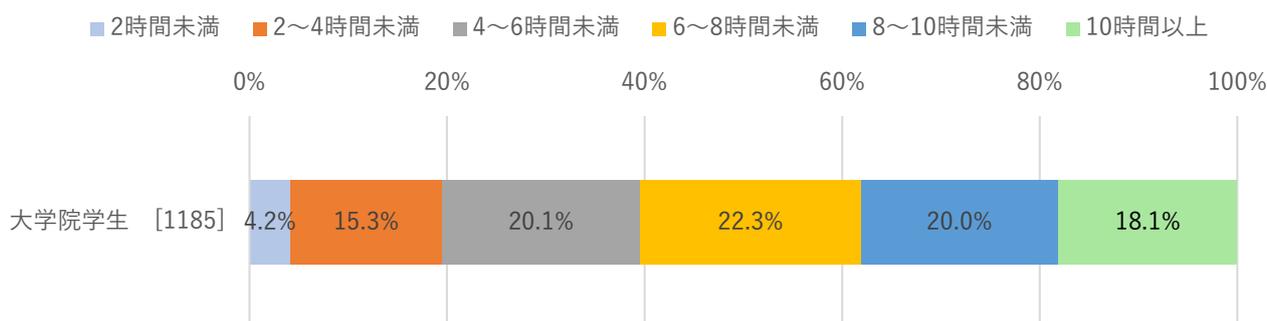
■ 一日の平均自習時間（学部学生・大学院学生別）

- 学部学生の一日の平均自習時間は、「1～2時間未満」(31.7%) が最も多く、次に「2～3時間未満」(26.1%)、「1時間未満」(16.3%) となっている。
- 大学院学生は、「6～8時間未満」が22.3%で最も多く、次に「4～6時間未満」(20.1%)、「8～10時間未満」(20.0%) となっている。学部学生と比べると大学院学生は、1日あたりの自習時間が長い。

【学部学生】



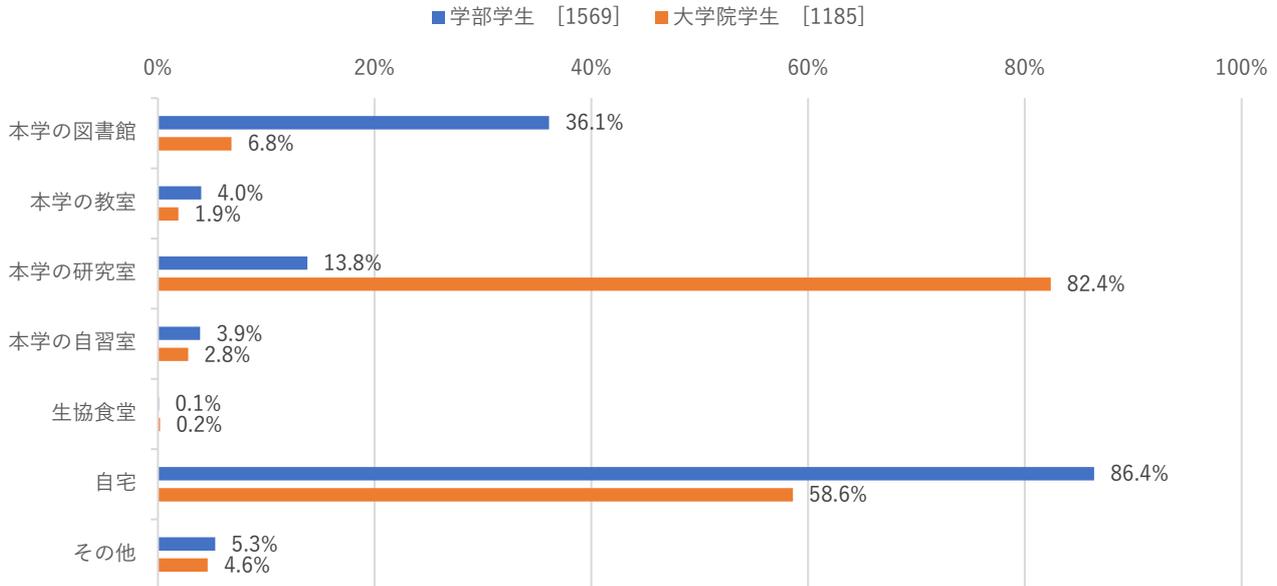
【大学院学生】



注1) [] は回答者数を示す。

■ 自習を行う場所

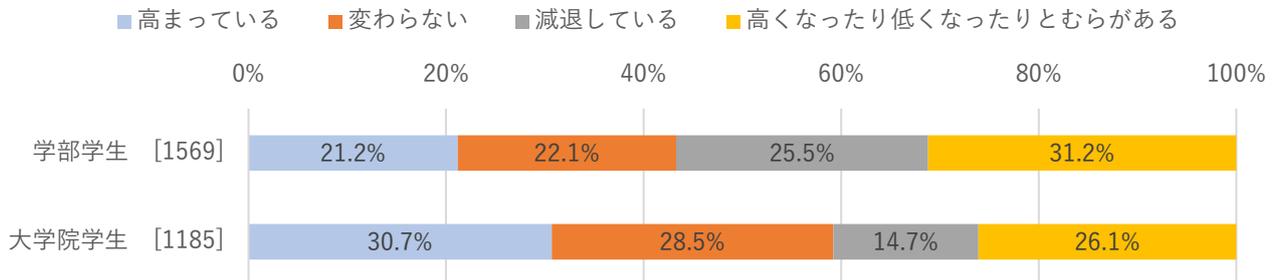
- 自習を行う場所は、学部学生は「自宅」(86.4%)が最も多く、次に「本学の図書館」(36.1%)が多い。
- 大学院学生は、「本学の研究室」(82.4%)が最も多く、次に「自宅」(58.6%)である。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 入学後の学習・研究意欲

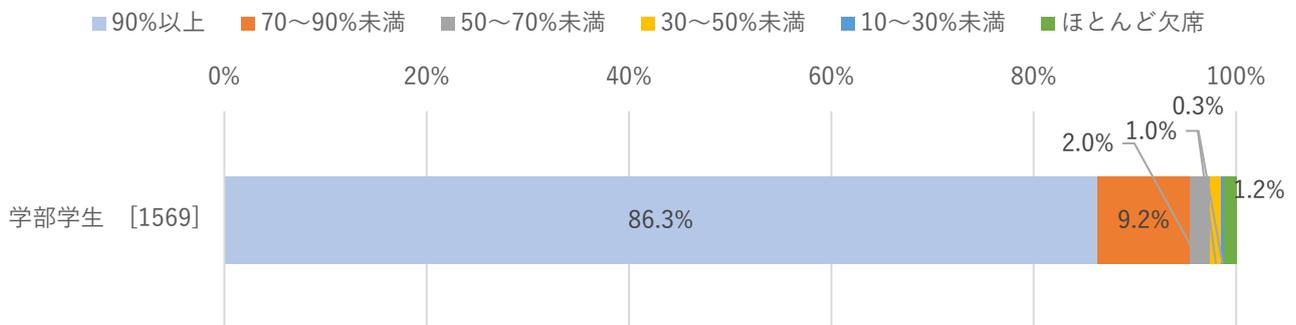
- 入学後に学習意欲が「高まっている」学生は、学部学生の21.1%、大学院学生の30.7%である。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 授業への出席率（学部学生のみ）

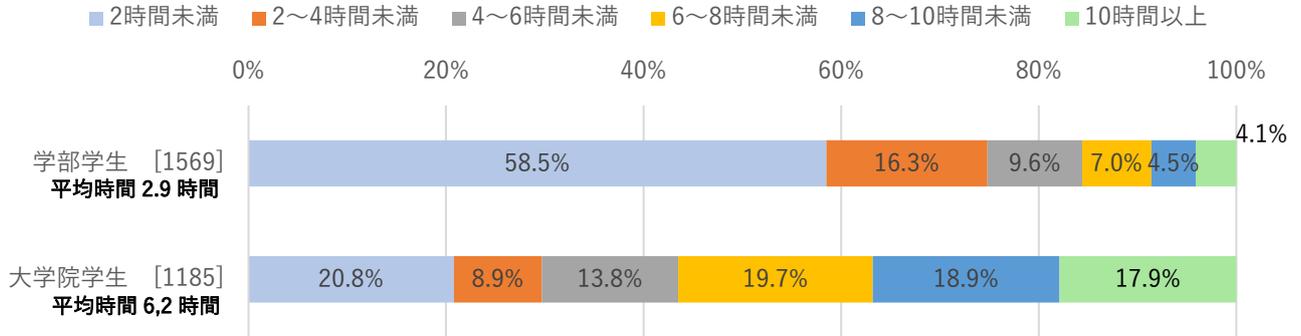
- 授業への出席率は、「90%以上」が86.3%で、平均出席率は91.1%である。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 大学で過ごす一日の平均時間

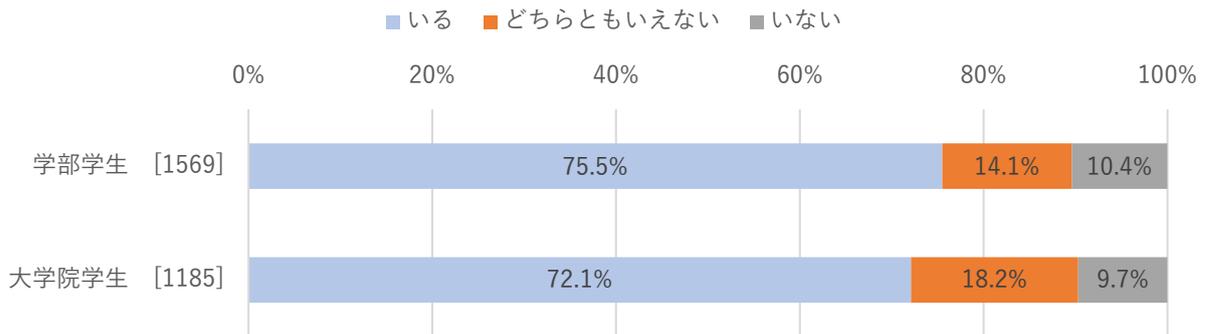
- 大学で過ごす一日の平均時間は、学部学生が 2.9 時間である。
- 大学院学生の平均時間は 6.2 時間であり、3 分の 1 以上の学生が 8 時間以上を大学で過ごしている。学部学生と比べて滞在時間が長い。



注 1) [] は回答者数を示す。

■ 相談できる友人の有無

- 相談できる友人が「いる」学生は、学部学生が 75.4%、大学院学生が 72.0%である。

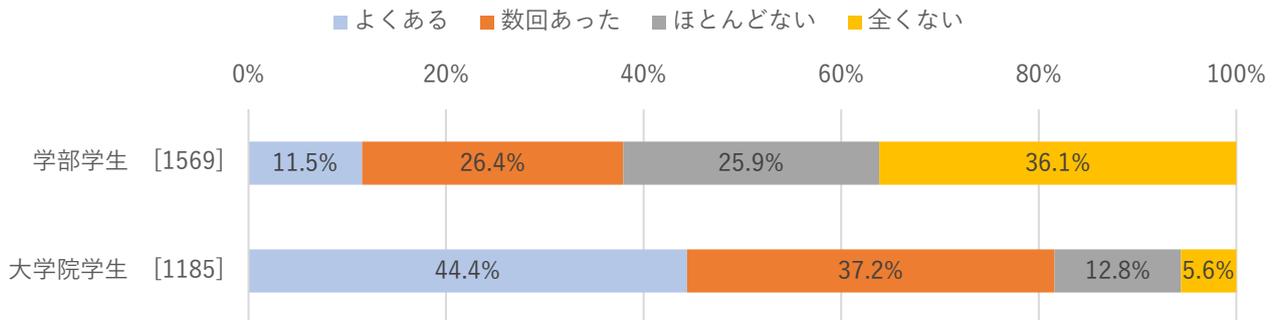


注 1) [] は回答者数を示す。

■ 教員との関係

- 教員との会話・相談機会が「ある」学生は、学部学生は「よくある」(11.5%)と「数回あった」(26.4%)を合算して 37.9%、大学院学生は「よくある」(44.4%)と「数回あった」(37.2%)を合算して 81.6%である。
- 相談しない学生の理由は、学部学生・大学院生ともに「なんとなく話しにくい」が多く、32%程度を占める。次に多いのが、学部学生で「必要がない」(31.5%)、大学院学生で「話しても仕方がない」(28.0%)である。

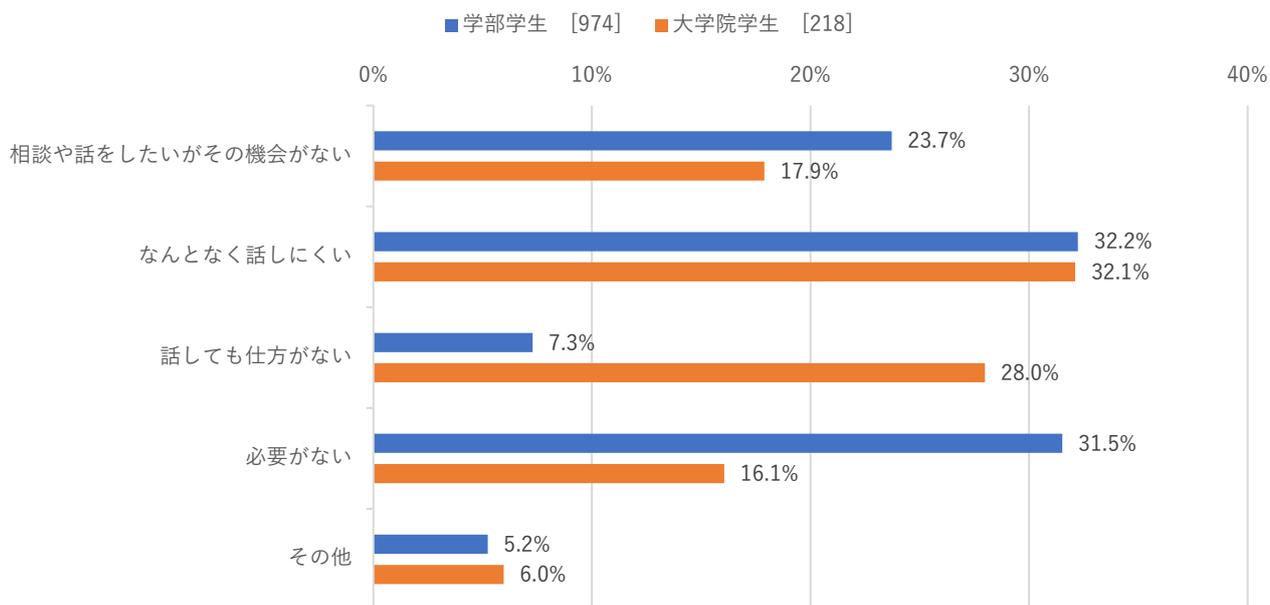
【教員との会話・相談機会】



注 1) [] は回答者数を示す。

【教員との会話・相談機会】

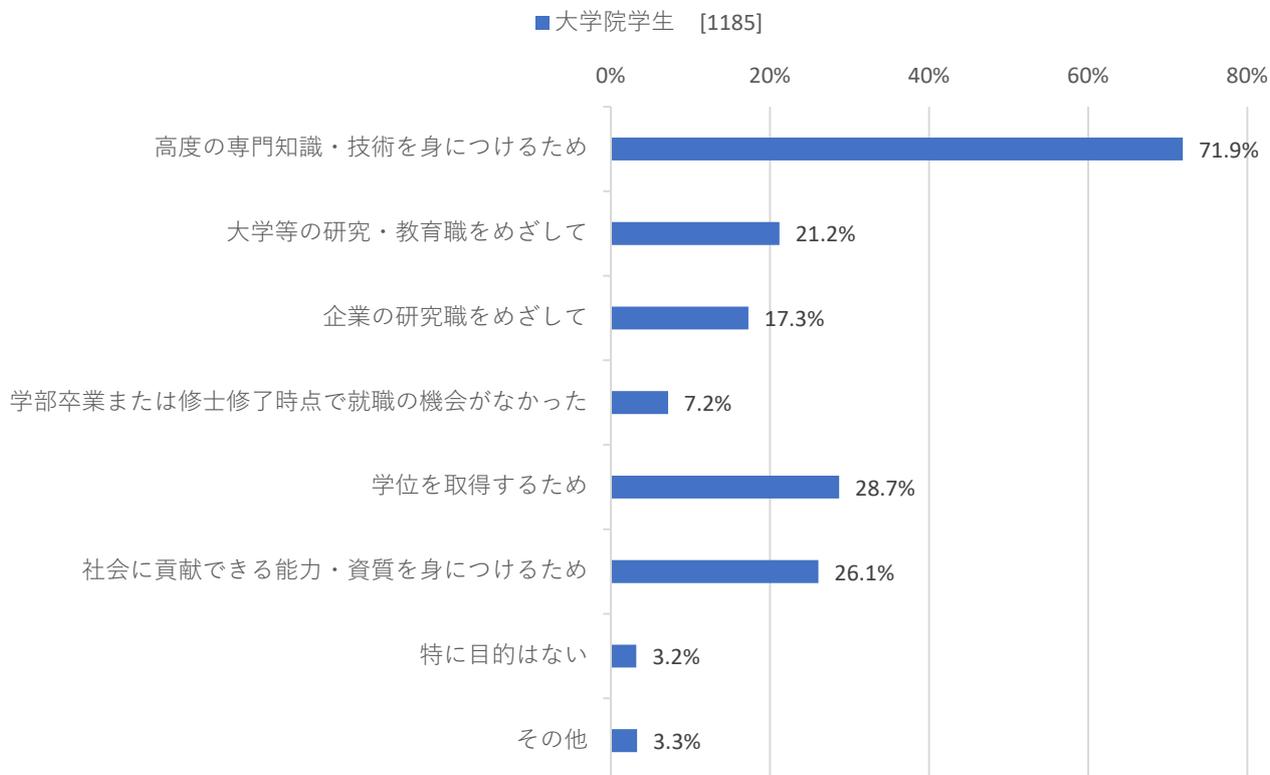
※教員との非談者ベース



注1) [] は回答者数を示す。

■ 大学院入学の目的（大学院学生のみ）

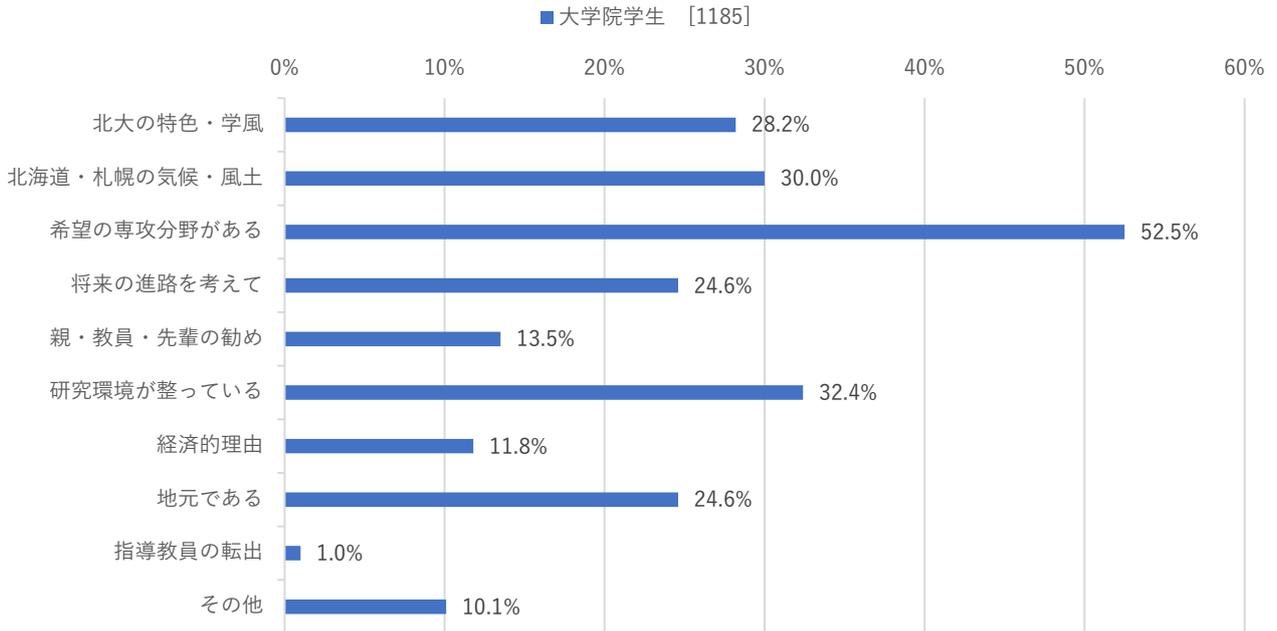
- 大学院入学の目的は「高度の専門知識・技術を身につけるため」(71.9%)が最も多く、次に「学位を取得するため」(28.7%)、「社会に貢献できる能力・資質を身につけるため」(26.1%)、「大学等の研究・教育職をめざして」(21.2%)、「企業の研究職をめざして」(17.3%)が続く。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 北大大学院を志望した理由（大学院学生のみ）

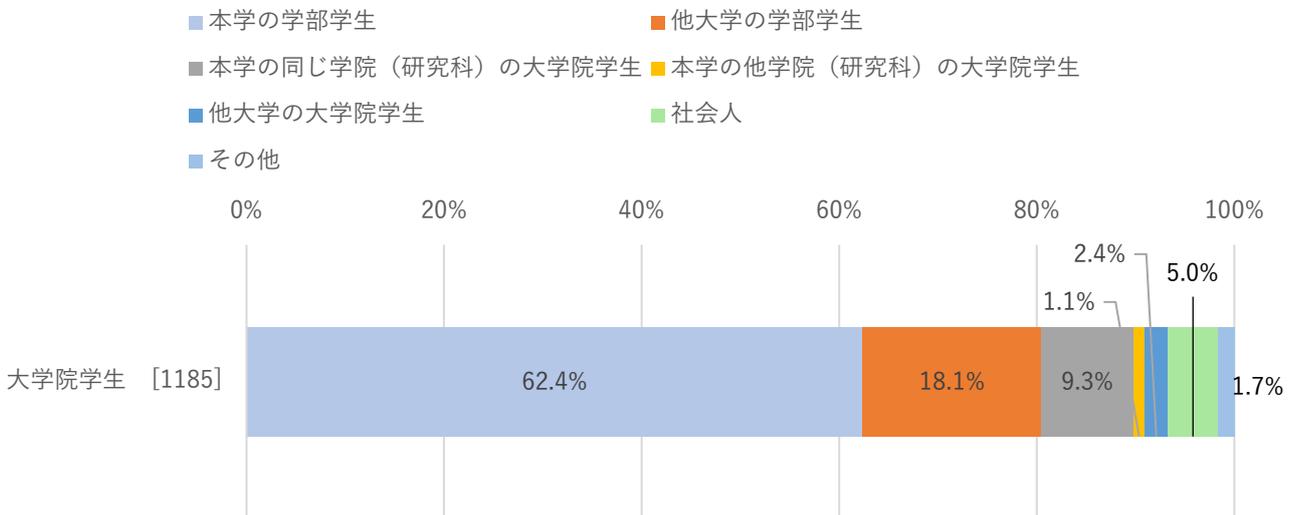
- 北大大学院を志望した理由は、「希望の専攻分野がある」（52.5%）が最も多い。次いで「研究環境が整っている」（32.4%）、「北海道・札幌の気候・風土」（30.0%）、「北大の特色・学風」（28.2%）などである。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 大学院入学前の出身大学等（大学院学生のみ）

- 「本学の学部学生」が62.4%と最も多く、次に「他大学の学部学生」（18.1%）である。



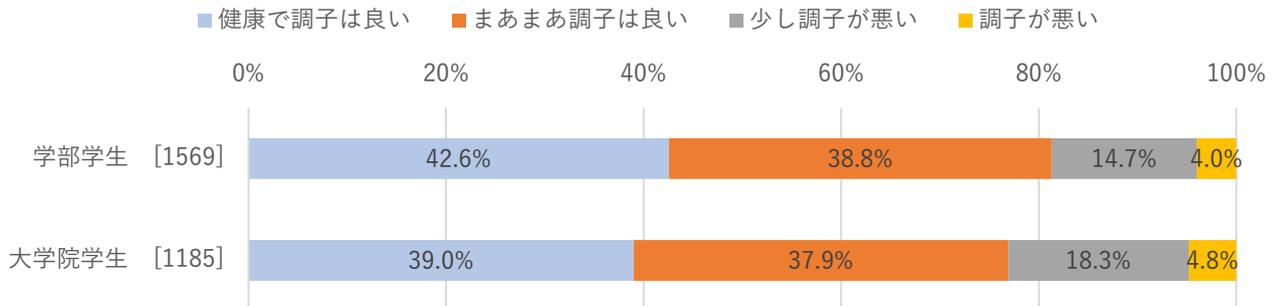
注1) [] は回答者数を示す。

Ⅰ 健康状態

■ 身体の調子／通院状況

- 学部学生は、「健康で調子は良い」が42.6%で、「まあまあ調子は良い」(38.8%)を合わせた81.4%が「調子が良い」としている。大学院学生では、「健康で調子は良い」が39.0%で、「まあまあ調子は良い」(37.9%)を合わせた76.9%が「調子が良い」と考えている。
- 身体の調子が悪い学生のうち、「通院している」学部学生は21.8%、大学院学生は36.1%である。

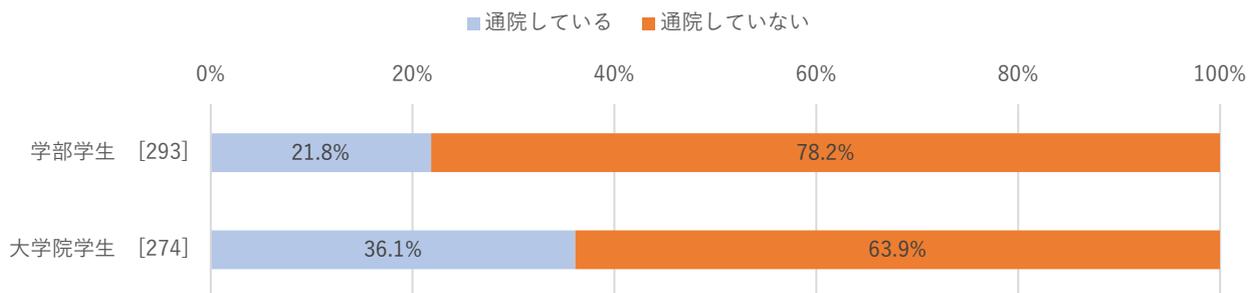
【身体の調子】



注1) [] は回答者数を示す。

【通院の有無】

※身体の調子が悪い者ベース

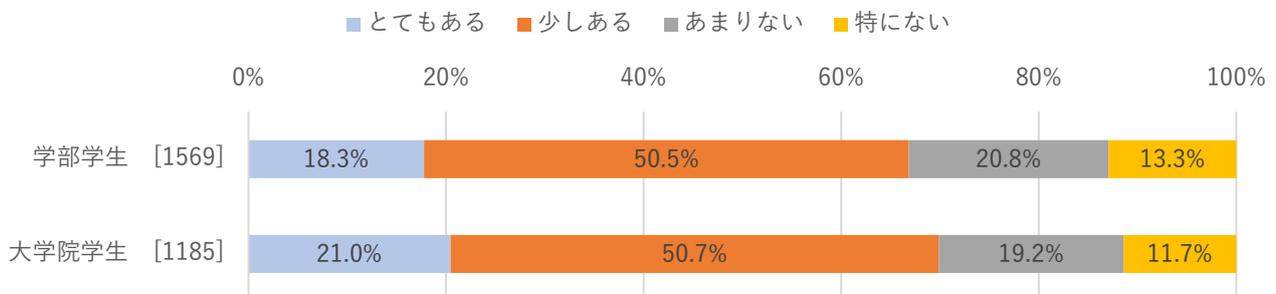


注1) [] は回答者数を示す。

■ 悩み・不安

- 悩み・不安が「ある(とてもある+少しある)」学生は、学部学生が68.8%、大学院学生が71.7%である。
- 悩み・不安の原因は、学部学生は「進路・就職」や「学業・成績」「人生・生き方」、大学院学生は「研究」や「進路・就職」の比率が高い。
- 相談相手は、学部学生・大学院学生ともに「北大の友人・先輩」が最も多く5割強を占めている。次に「家族」が45%弱である。

【悩み・不安の有無】

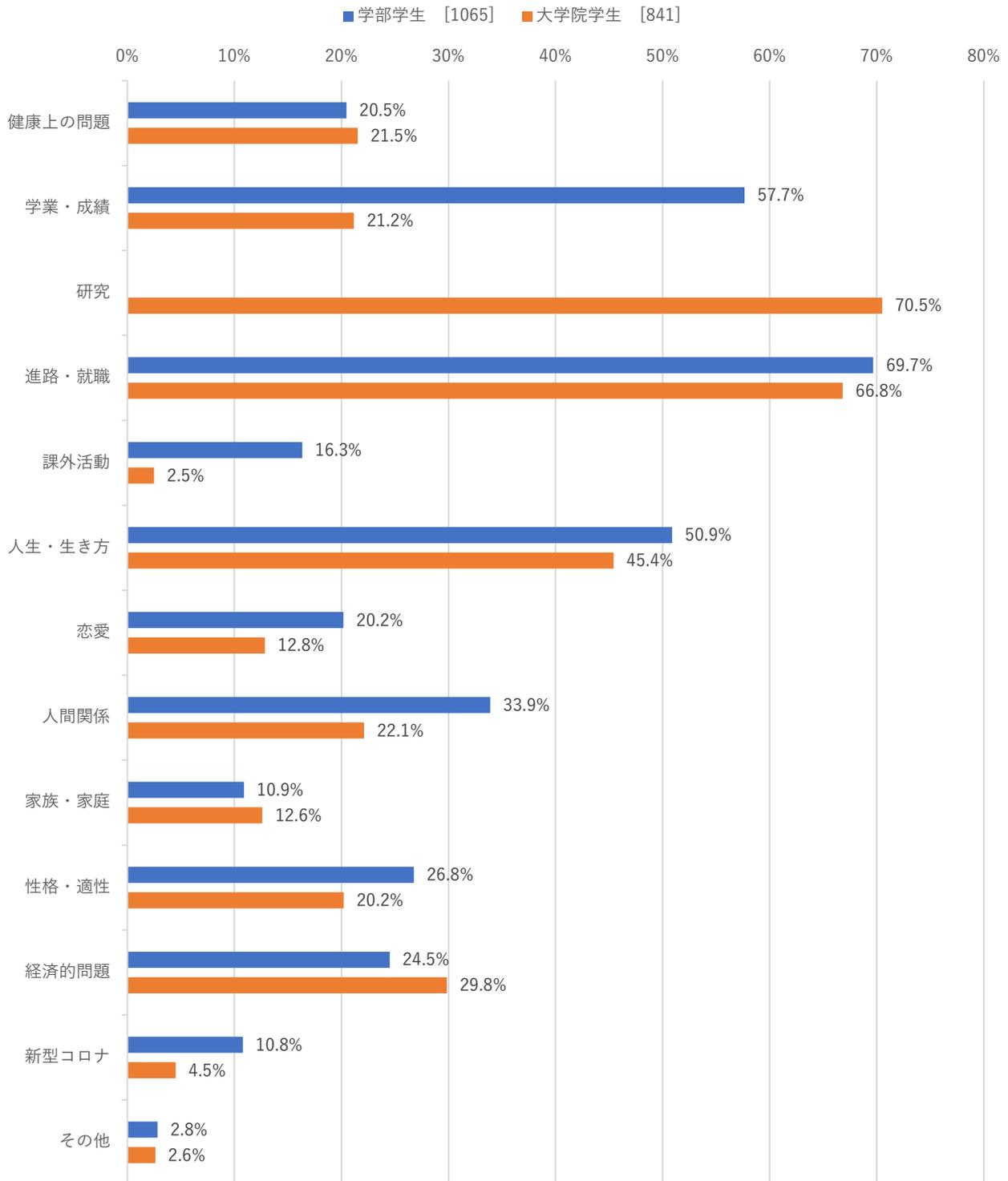


注1) [] は回答者数を示す。

【悩み・不安の原因】

※悩み・不安がある者ベース

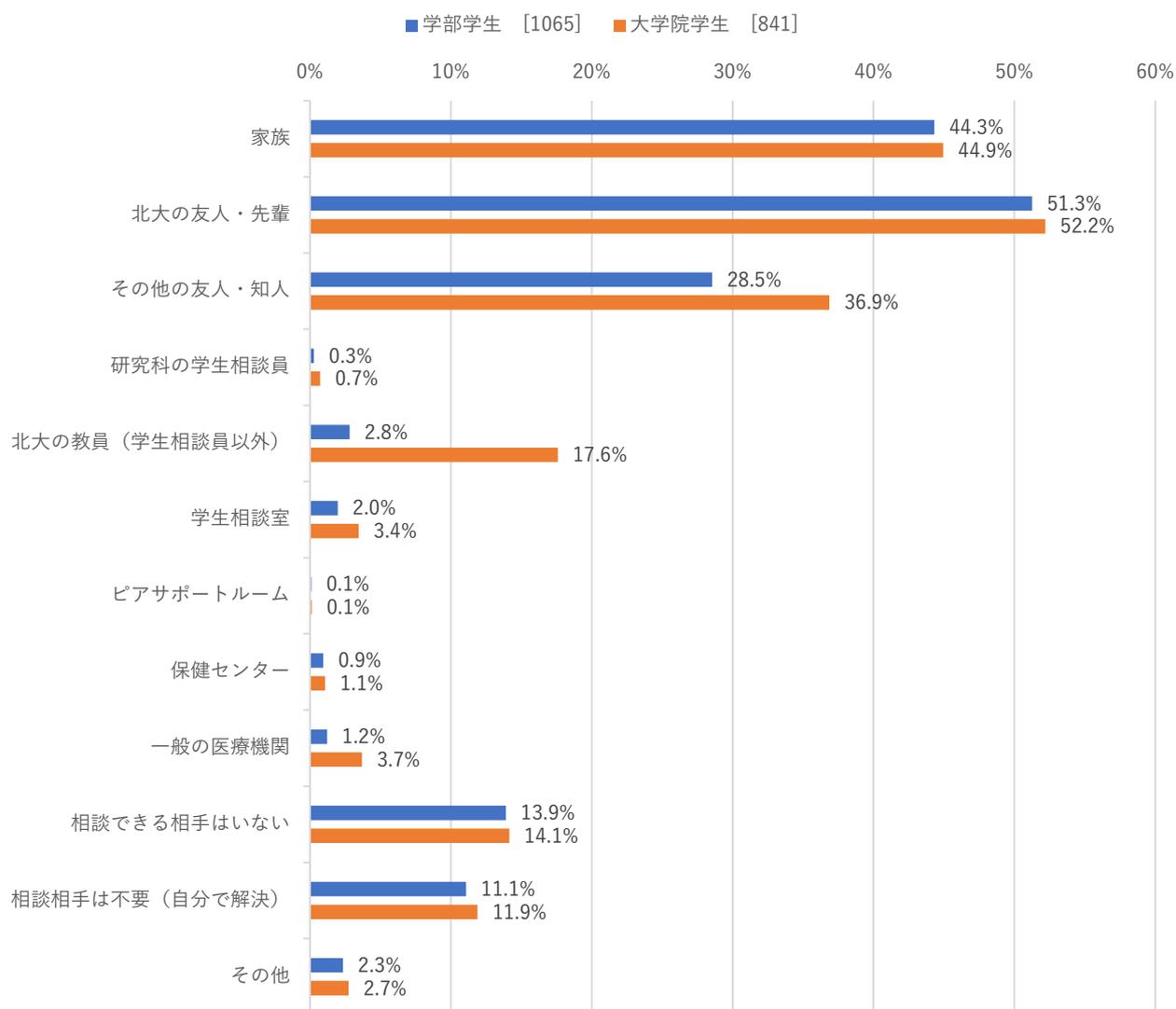
※学部学生については、「研究」の選択肢なし



注1) [] は回答者数を示す。

【悩み・不安の相談相手】

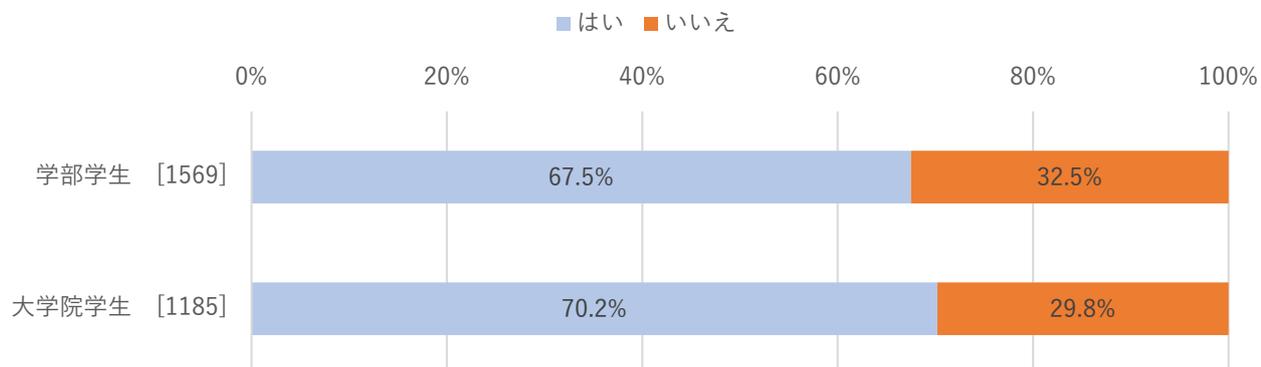
※悩み・不安がある者ベース



注1) [] は回答者数を示す。

■ カウンセリングサービスの認知状況

• カウンセリングサービスの認知度は、学部学生が67.4%、大学院学生が70.2%である。



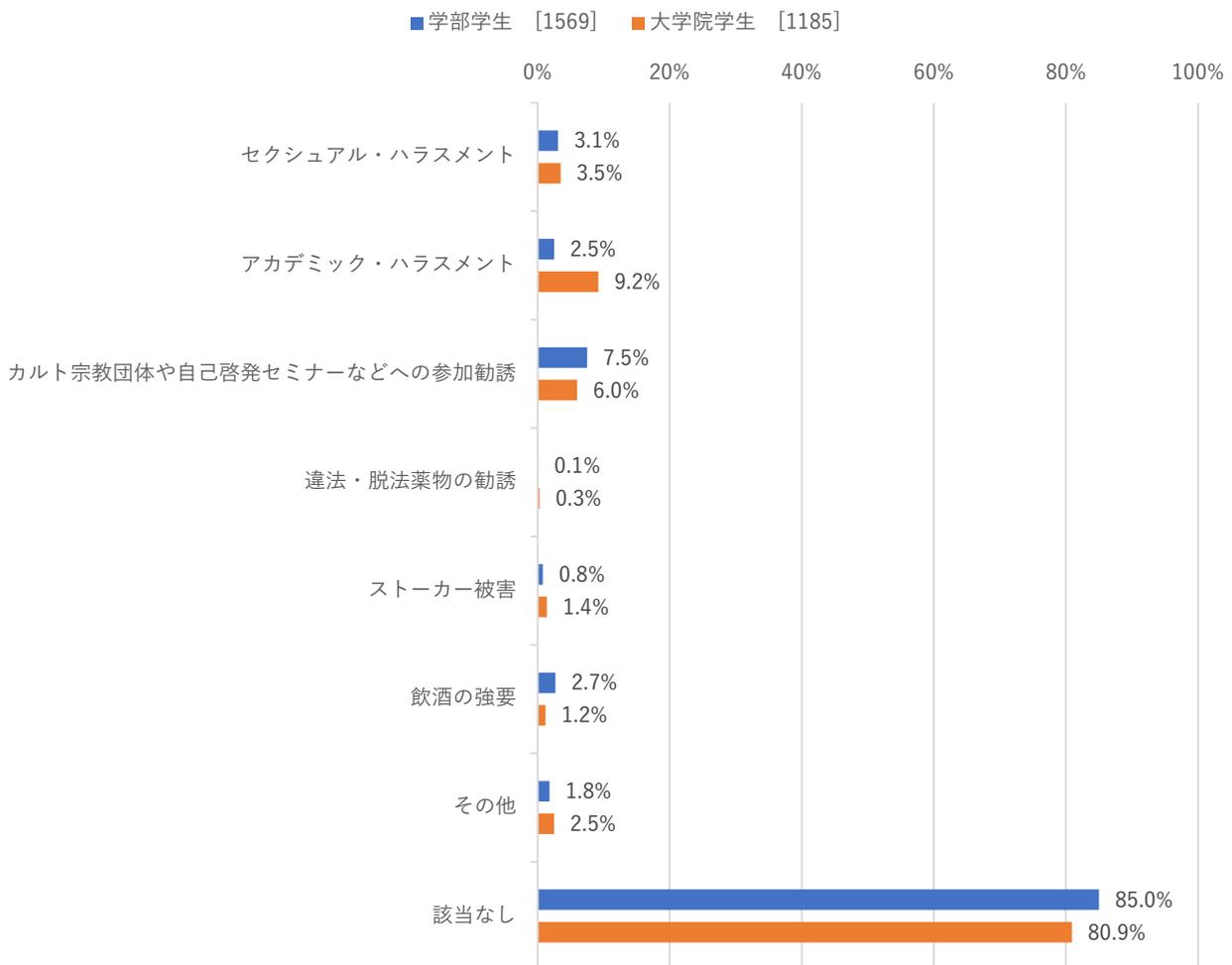
注1) [] は回答者数を示す。

J ハラスメント及びカルト宗教団体等の被害状況

■ 自身のハラスメント等の被害経験／他人のハラスメント等の被害を見聞きした経験

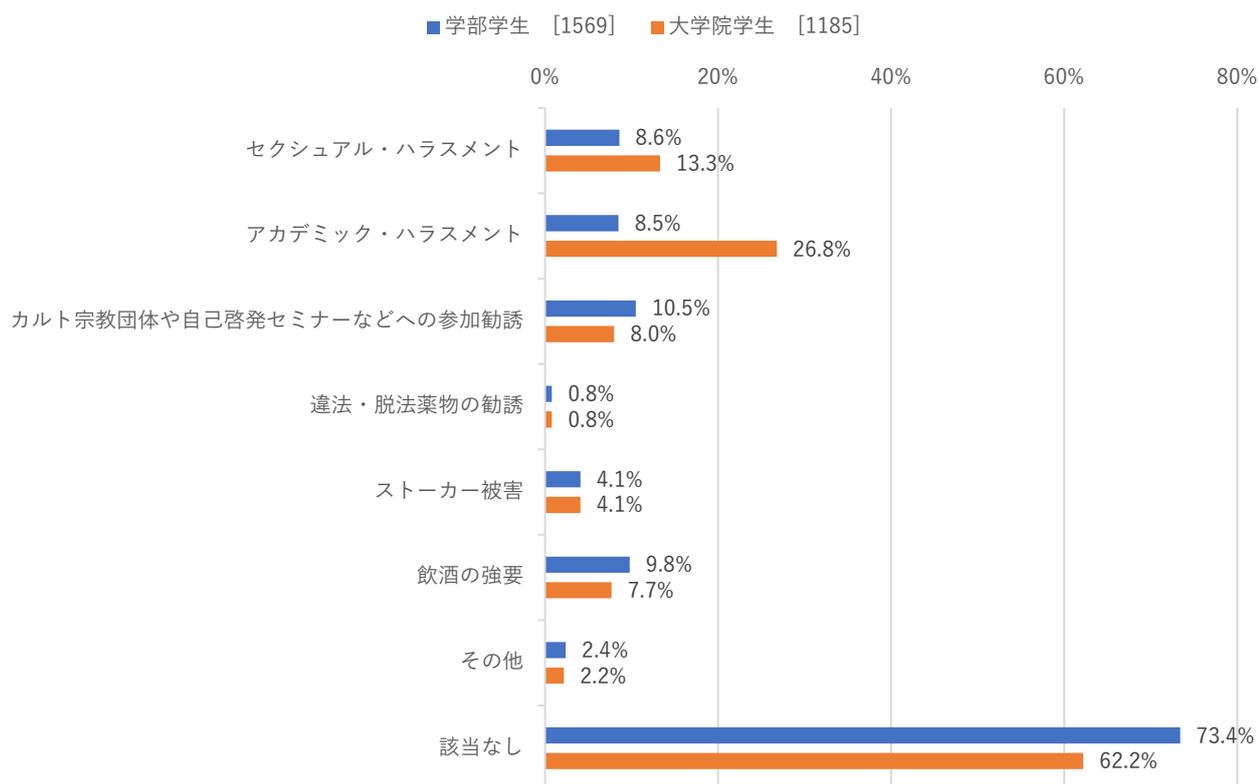
- 自身のハラスメント等の被害経験は、「該当なし」が、学部学生は85.0%、大学院学生は80.9%で8割強を占める。被害で多いのは、学部学生は「カルト宗教団体や自己啓発セミナーなどへの参加勧誘」(7.5%)、大学院学生は「アカデミック・ハラスメント」(9.2%)。
- 他人のハラスメント等の被害を見聞きした経験は、「該当なし」が学部学生は73.4%、大学院学生は62.2%でおよそ6~7割である。学部学生・大学院学生はともに「セクシュアル・ハラスメント」「アカデミック・ハラスメント」「カルト宗教団体や自己啓発セミナーなどへの参加勧誘」、「飲酒の強要」を見聞きした経験の比率が多い。また大学院学生は「アカデミック・ハラスメント」の比率が、学部学生と比べて特に高い。
- 学部学生・大学院学生ともに、自身の被害以上に、他人の被害を見聞きする割合が高い。

【自身のハラスメント等の被害経験】



注1) [] は回答者数を示す。

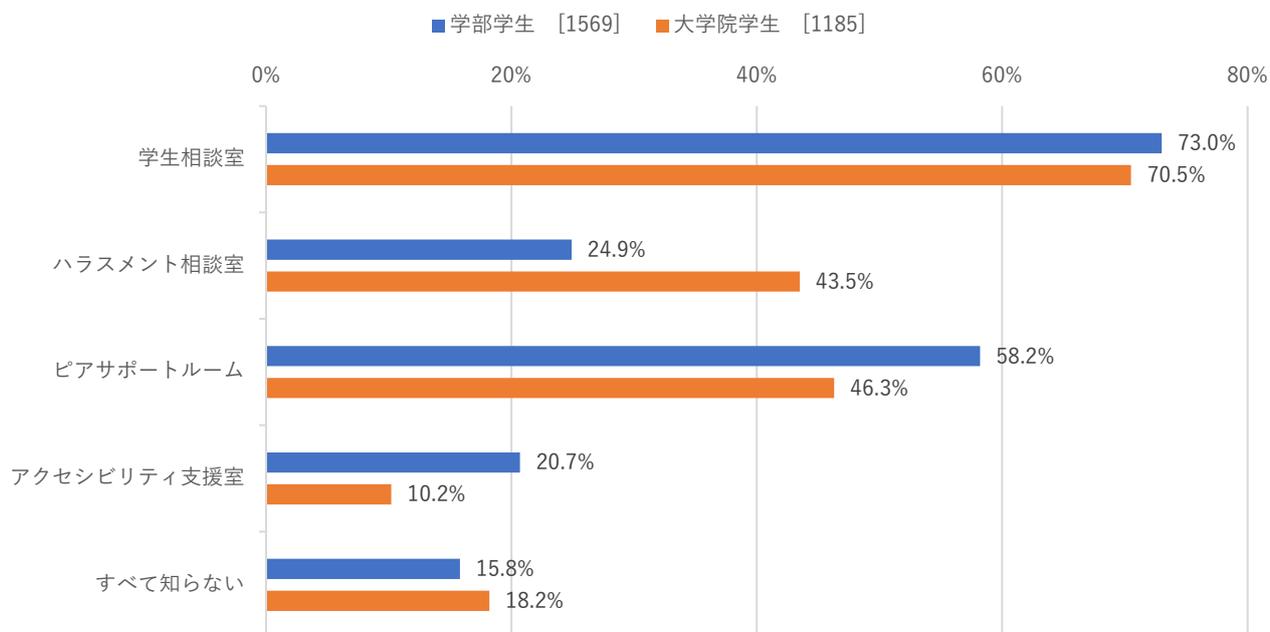
【他人のハラスメント等の見聞き経験】



注1) [] は回答者数を示す。

■ 学生相談窓口の認知状況

- 「学生相談室」については、学部学生・大学院学生ともに7割以上が認知している。「ピアサポートルーム」は、学部学生の6割近くが認知しているが、大学院学生は46.3%に留まる。

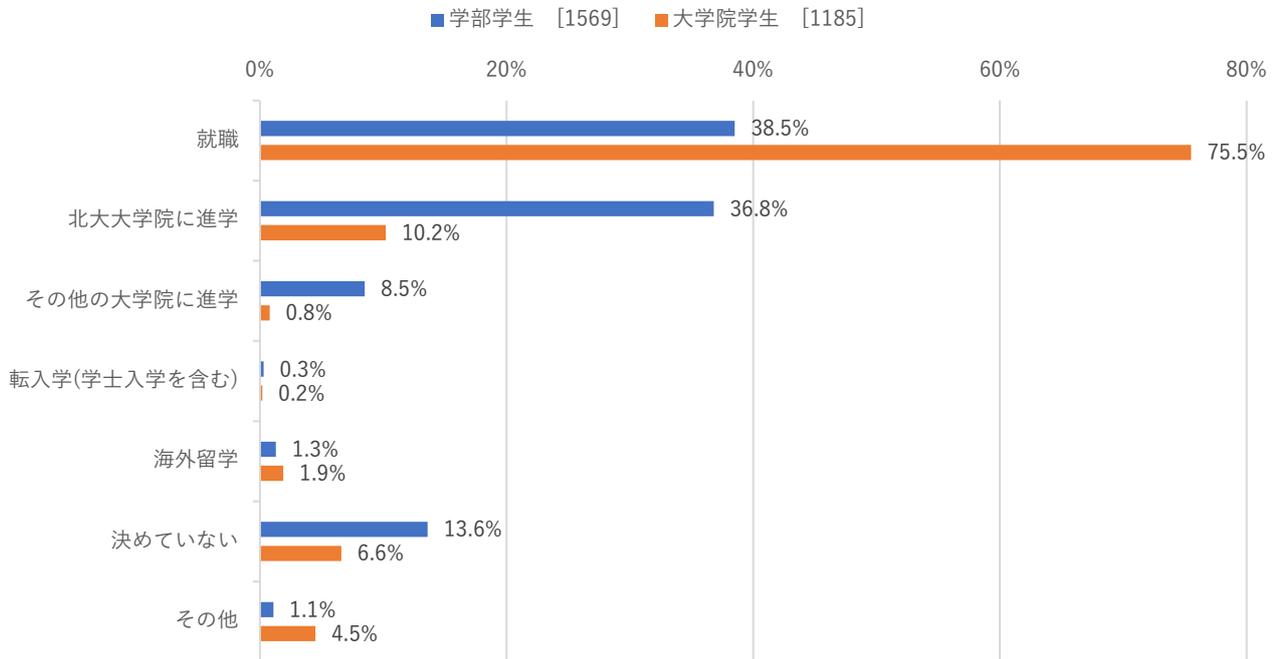


注1) [] は回答者数を示す。

K 進路の希望

■ 卒業後の進路希望（学部学生）／修了後の進路希望（大学院学生）

- 学部学生は、「就職」（38.5%）と「北大大学院に進学」（36.8%）に分かれる。
- 大学院学生は、75.5%が「就職」を希望している。

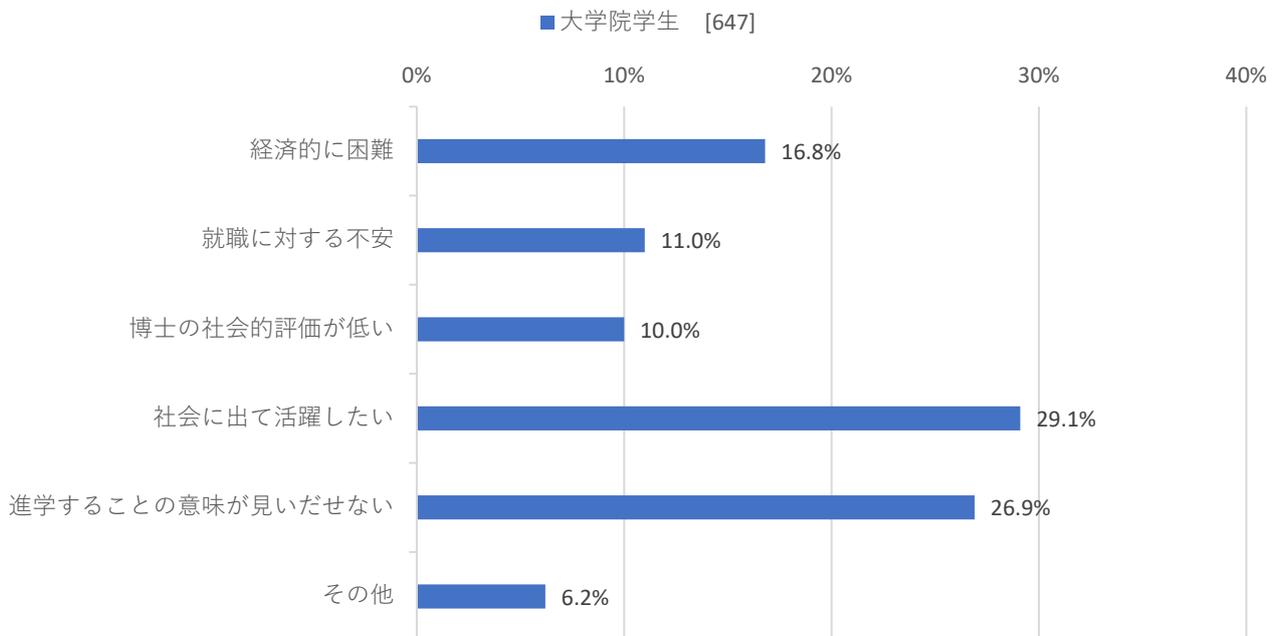


注1) [] は回答者数を示す。

■ 博士後期課程に進学しない理由（大学院学生のみ）

※博士後期課程非進学者ベース

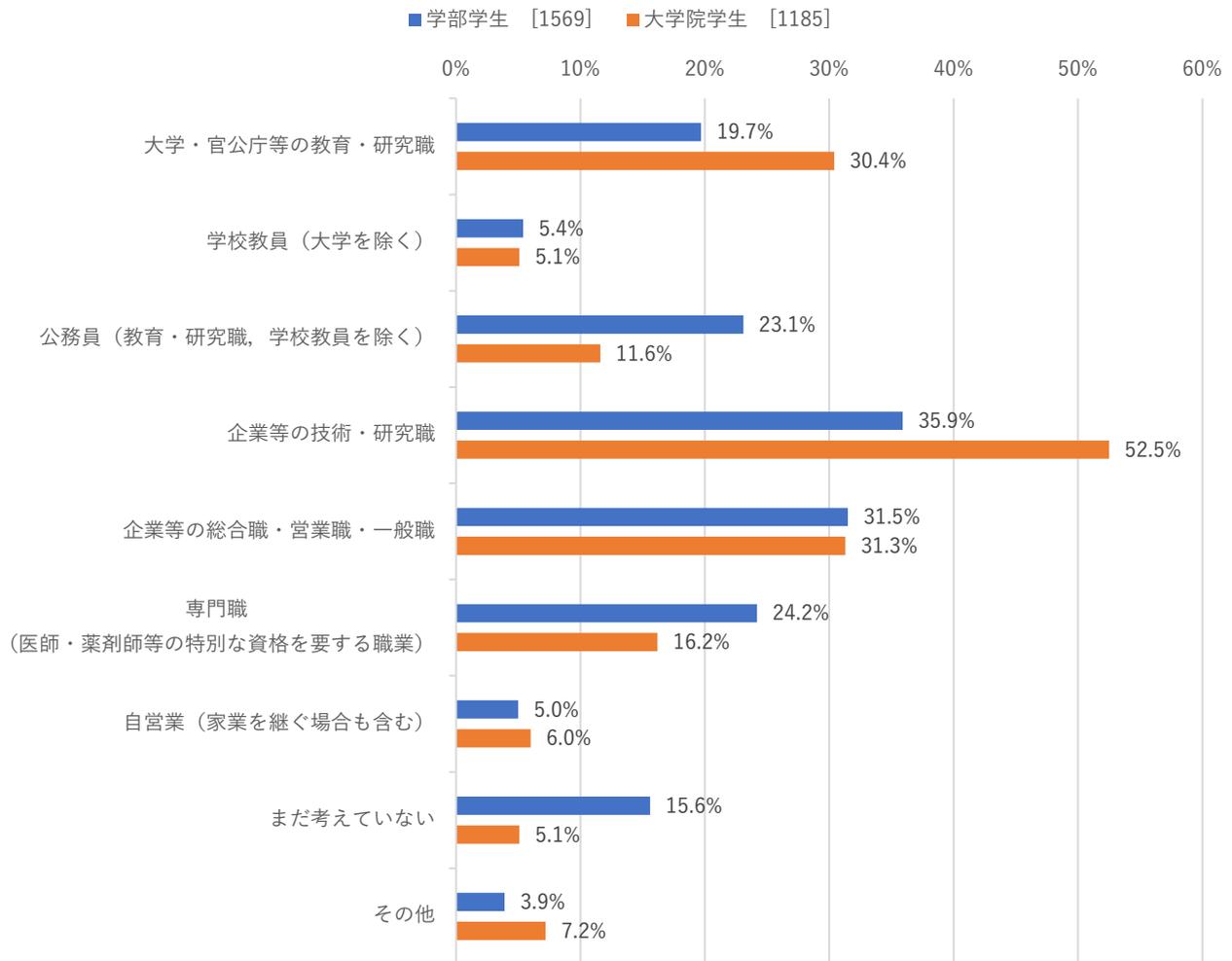
- 博士後期課程に進学しない理由は、「社会に出て活躍したい」（29.1%）が最も多く、次に「進学することの意味が見出せない」（26.9%）、「経済的に困難」（16.8%）となっている。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 希望職種

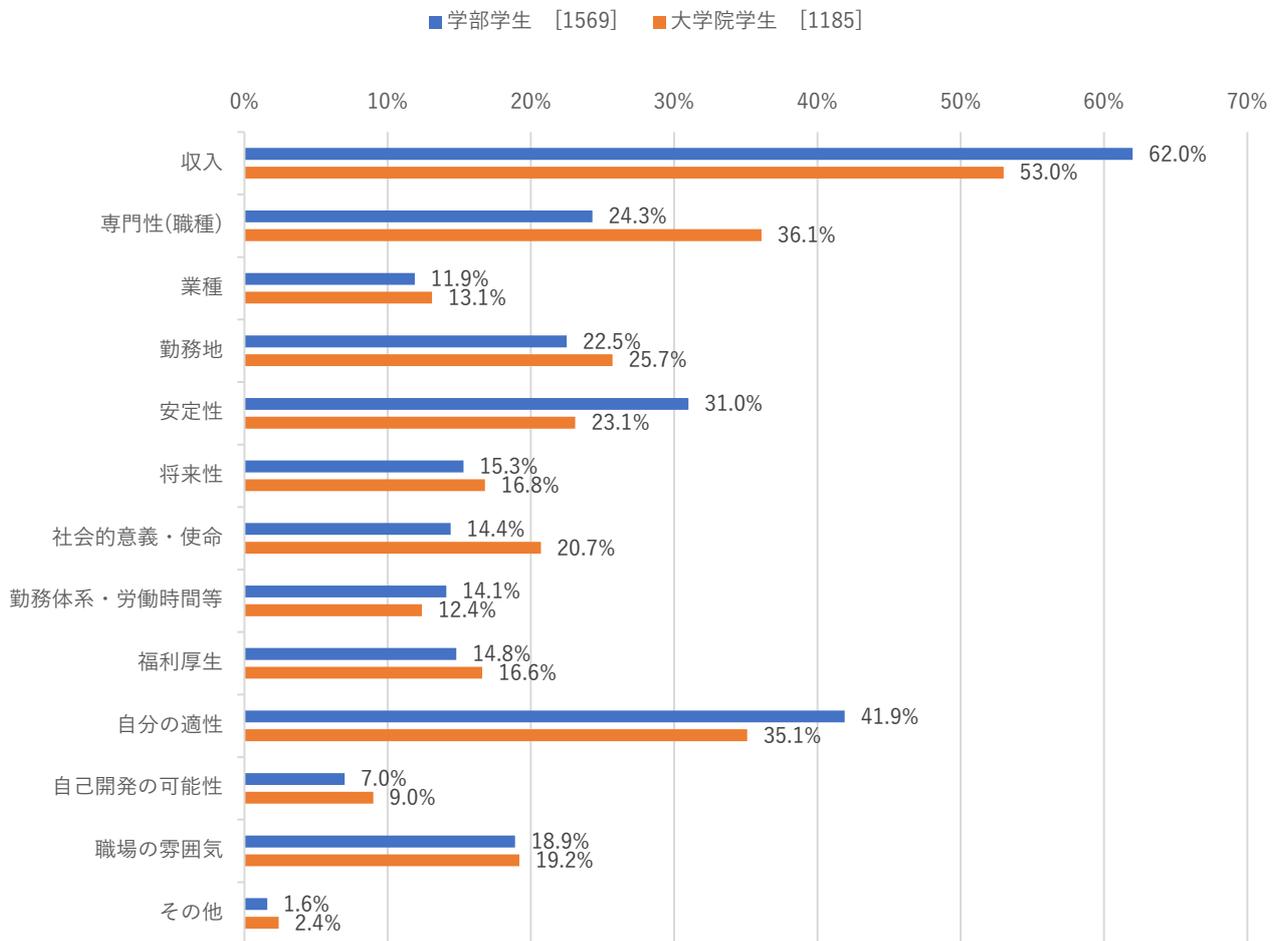
- 希望職種は、学部学生・大学院学生ともに「企業等の技術・研究職」が最も多く、大学院学生は学部学生と比べても多い。「公務員」や「専門職」は、学部学生の方が希望する者が多い。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 就職で重要視すること

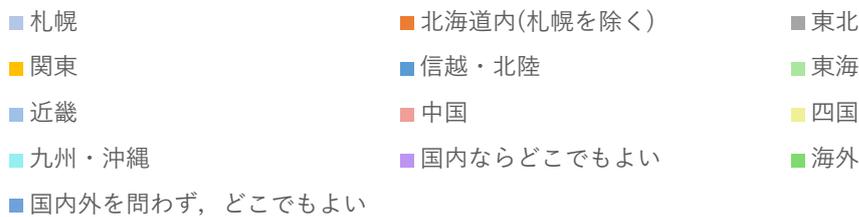
- 学部学生・大学院生ともに「収入」と「自分の適性」が就職で重要視する上位1位、2位である。学部学生は、大学院学生と比べて、「収入」と「自分の適性」をより重要視する傾向がある。
- 大学院学生は、学部学生と比べて、「専門性（職種）」を重要視する傾向がある。



注1) [] は回答者数を示す。

■ 就職希望地域

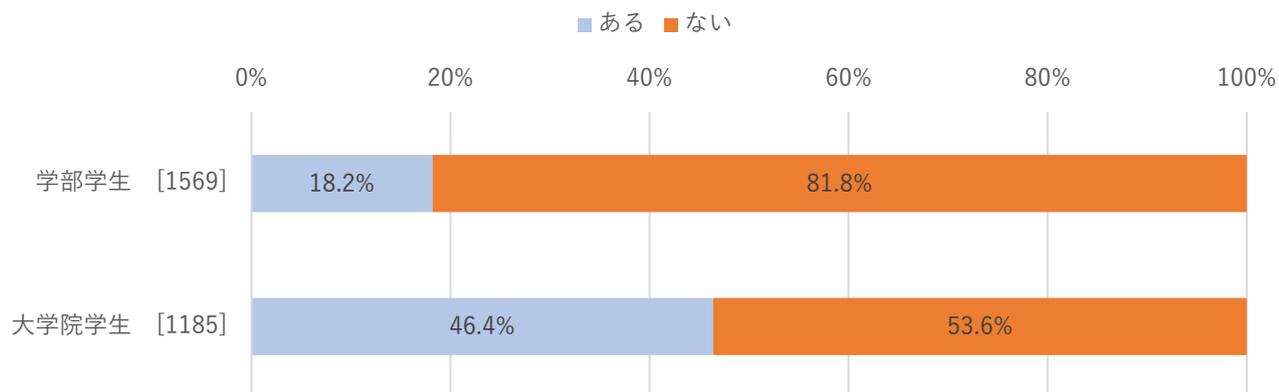
- 学部学生は大学院学生と比べて、「札幌」を希望する割合が高い。札幌を含む北海道に次いで関東への希望が多くなる。



注1) [] は回答者数を示す。

■ インターンシップ参加経験

- インターンシップへの参加経験は、学部学生が18.2%、大学院学生が46.4%で、大学院学生の方が、参加経験者が多い。



注1) [] は回答者数を示す。

学生生活実態調査報告書（概要版）2022 年版

発行日 2022 年 4 月

編集発行 北海道大学学務部学生支援課

〒060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目

TEL: 011-706-7467